東北学院礼拝説教集　第３号

〈特集〉

いのち

言の内に命があった。
命は人間を照らす光であった。
（ヨハネによる福音書第１章４節）

表紙イラスト　ひぐちけえこ

＜特集＞

い の ち

命の尊さ、良く生きること

東北学院礼拝説教集　第３号

2023年３月31日
東北学院宗教センター発行

目次

第三号発刊にあたって　原田　浩司……6

副題「いのち」について　野村　信……7

◆心の目
～イエス様を見つけよう　島内久美子……8

◆いのちと弱さ～神様のお働き　松井　浩樹……12

◆なくならないもの　髙　アンナ……16

◆わたしは復活であり、命である
～生きる希望が与えられる　西間木　順……20

◆島崎藤村への父親の愛
～あなたに寄り添う人がいる
大西　晴樹……26

◆さあ、ベツレヘムへ
～あなたのためのクリスマス
原田　浩司……32

◆良く生きること
～なぜ良く生きれるのですか？
野村　信……38

◆モーセにおける神の啓示－存在と認識の一致をめぐって
～私が私であるとは？
川島　堅二……44

◆キリストの体のイメージを心に描いて生きる
～多様性のまなざし
出村みや子……52

◆いのちの源
～いのちって何？
木村　純二……58

◆憩いの汀に
～人生に本当に必要なものとは
田島　卓……64

◆命の連鎖
～世代を超えて伝えられる祝福
藤野　雄大……68

◆天にある希望
～永遠の命
渡邊　有美……74

◆狭い門と決断
～命に通じる門とは？
椎名雄一郎……78

◆喜び・祈り・感謝
～私たちに先立つ神の愛
大門　耕平……84

◆「永遠のいのち」と「この世のいのち」
～有限なこの命を生きる
鐸木　道剛……90

◆命に通じる門
～キリストが門であるとは？
望月　修……96

◆向こう岸へ渡ろう
～安心し、勇気を出して漕ぎ出せる
瀬谷　寛……100

◆バベルの塔
～心を一つにして
中本　純……104

◆永遠の命を得て生きる
～サナギが蝶になるために
林　完赫……108

◆神はその独り子をお与えになったほどに
～神から与えられた命
松本　宣郎……114

◆あなたのために生まれました
～あなたの居場所はどこ？
赤井　慧……122

あとがき
原田　浩司……134

第三号発刊にあたって

東北学院の教育の真骨頂は、礼拝における、聖書の御言葉による、人格教育にあると言っても過言ではありません。二〇二二年度も「コロナ禍」の霧は晴れることなく、多い人数が集い、讃美歌を歌唱する礼拝の実施には、感染状況の動向を注意しながら、多少の制限を設けながら実施してきました。この第三号の説教集に収録されている説教は、この二〇二二年度に東北学院の各設置校の礼拝で、園児・生徒・学生たちに語られたものです。説教を聞く子どもたちの成長段階に合わせながら、各設置校の先生方がそれぞれの切り口で、聖書の言葉を魅力的に説き明かして下さいました。ここに収録されたのは実際に語られたものの一部に過ぎず、ここに収録されない数々の説教が語られました。収録されている説教の多くが東北学院大学の礼拝で語られたものであり、未成年から成人へと成長する過渡期を生きる若者たちに向けて語られています。

今年度は、東北学院のスクールモットー「ＬＩＦＥ　ＬＩＧＨＴ　ＬＯＶＥ」の三つの英単語の内「ＬＩＦＥ（いのち）」に焦点を絞り、説教集にまとめました。一人でも多くの方たちに、東北学院が掲げるスクールモットーをとおして、東北学院の教育の真骨頂の一端に触れていただきたいと願っています。

副題「いのち」について

東北学院宗教センターが発足してから三年が経ちました。当センターでは、東北学院に属する各学校の礼拝で語られた説教を収録し、公刊することで、園児の保護者、中学・高校の生徒、大学生、また一般の人たちに、本学が大切にする学校礼拝をより良く理解いただけるように願って『説教集』を出版しています。

毎年実施される編集会議では様々な意見を出して、より親しみやすい説教集を作成する努力を重ねていますが、これから三年に亘って、本学のスクールモットーである「LIFE LIGHT LOVE（命、光、愛）」の言葉を副題にして特集を組むことにしました。本号は、「LIFE（命）」を特集いたします。英語のLIFEは、「命」、「生きること」、「生活」などを意味しますが、これに関する内容をもつ説教を先生方から選んでいただき寄稿していただきました。

現代社会は、「命」、「生きること」そのものについて多くの問いが発せられています。感染症が収束せず、戦争の災禍、自然災害の多発、経済的な不安、少子化など、「生きること」そのものが真剣に問われている時代です。このような時代にあってこそ、もう一度私たちの「命」、「生」の原点に立ち、自らを振り返りたいと願います。この説教集が、私たちの「命」と「生きる」ことの大切さを考える一助となることを期待しています。

心の目

幼稚園　園長　島内　久美子

コリントの信徒への手紙二　四章一八節

18 わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

クリスマスの東の国の博士を覚えていますか?救い主のお生まれを知らせるしるしの星を見つけ、星を目あてに長い旅をしてイエス様にお会いすることができましたね。

博士はどちらにいらっしゃるのだろうかと、はじめにベツレヘムのヘロデ王のお城にいきました。救い主がお生まれになったのです。お城の王様なら知っていると考えたのでしょう。しかし、王様は救い主のお生まれを知らないといいました。ヘロデ王には羊飼いのように神様のお告げはありませんでした。お城を出た博士は再び星に導かれてイエス様にお会いすることができました。

博士たちは、大きく立派なお城に住み、家来も沢山いて、きれいな服、輝く宝石を身につけていたヘロデ王に会った後に、イエス様のところに来ました。壁もない家畜小屋はとても寒く、きれいとは言えない小屋で誰が見ても人が泊まるような場所ではないことは一目でわかります。しかもイエス様は動物がえさを食べる箱、飼い葉桶に寝かされていました。他の人が見たら、世界でただ一人の王様、救い主とは思えなかったでしょう。けれどすぐに救い主とわかり、持ってきた宝物をお捧げしました。博士達は、大きなお城に住んでいる、きれいな宝石や服を身につけているなどといった見た目だけで救い主を判断しませんでした。博士達は心から救い主の誕生を信じ、心の目で見ていたからこそ、赤ちゃんイエス様を、救い主を見つけることができたのだと思います。

聖書の中に、「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」（コリントの信徒への手紙二　四：一八）というみ言葉があります。神さまの愛がそうです。目に見えないけれど、心の目で見ると見えるものです。元気なからだ、お友だちと仲良く遊べること、おいしいごはんが食べられることなど、みんなが大きくなるとき

に必要なものを神さまは与えてくださっています。おもちゃのように壊れたり、無くなってしまうものではないのです。目に見えることだけに心を奪われることなく、博士のように目には見えない神さまの愛を心の目で見て、神様、イエス様ありがとうございますという気持ちで過ごしていきましょう。

《お祈り》

天のやさしい神さま、いつも私たちを守ってくださってありがとうございます。

神さまは私たちに大切なものをたくさんくださっています。けれど、時々心が曇ってしまい、見えなくなるときがあります。

博士のように神さまの愛が見えるように、私たちの心の目をきれいにしてください。

このお祈りをイエス様のお名前をとおしてお捧げいたします。アーメン

思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。

神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです。

（ペトロの手紙Ⅰ　５：７）

いのちと弱さ～神様のお働き

中学校・高等学校　宗教主任　松井浩樹

マタイによる福音書　二六章三六～四六節

ゲツセマネで祈る

36それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。37ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。38そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」39少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」40それから、弟子たちのところへ戻って御覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。41誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」42更に、二度目に向こうへ行って祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」43再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったので

ある。44そこで、彼らを離れ、また向こうへ行って、三度目も同じ言葉で祈られた。45それから、弟子たちのところに戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。時が近づいた。人の子は罪人たちの手に引き渡される。46立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」

主イエスが逮捕直前に「ゲツセマネ」という場所で祈る場面です。この記事を注意深く読むと「弱さ」が際立って見えてきます。まず、最初の弱さはイエス・キリストご自身の弱さです。主イエスは「十字架を前にして、悲しみもだえ始められた」と記されます。つまり主イエスは、完全無敵な偉大な救い主ではありません。まったく私達と同じ人間でもあったことが改めて思い起こされるのです。私たちもまた、苦しみの経験があります。重い病にかかった、愛する人が亡くなった、人生の中で私たちもしばしば「もだえ苦しむ」のです。その時、私たちは主イエスでさえ、「悲しみもだえ」られたことを知り、むしろ慰められる思いに至ります。主イエスは苦しまれる神でもあった。だからこそ、私達の苦しみをも理解され、その苦しみによって私達に新しい生きる道を備えられた救い主であるのです。

また、直前の記事でペトロの裏切りが予告されていました。主イエスが「今夜、あなたがたは皆私につまずく」と言われた時に弟子のペトロは「たとえ、みんながつまずいても、私は決してつまずきません」と答えました。そのペトロはイエスが「悲しみもだえつつ」祈っておられた時に眠りこんでいました。主イエスを逮捕する人たちが迫った時には一目散に逃げ出したのです。やがて主イエスが大祭司の屋敷に連行された時、ペトロは後を追いかける行動を取ります。しかしながらその屋敷の人々に「おまえもイエス

の仲間だ」と問い詰められると、「そんな人は知らない」と三度、否認します。結果、『鶏が鳴く前に、あなたは三度私を知らないと言うだろう』と言われたイエスの言葉を思い出し、そして外に出て激しく泣いたことが後の記事で明らかになります。つまり、ペトロは自分の弱さに泣いたのです。

この弱さが際立つ一番弟子と言われたペトロですが、ヨハネ福音書によれば、主イエスが十字架で死なれた後、故郷であるガリラヤに帰ります。元の漁師の仕事に戻ったのです。そこに復活のイエスが現れ、ペトロに語りかけるのです。主イエスは、そこでペトロが裏切ったことを一言も責めることはしません。ただただ一言、もう一度ペトロに「私を愛するか」と三度、聞くのです。三度目の時に、ペトロは悲しんで言います「主よ、あなたはすべてをご存知です。あなたは私の弱さを知っておられます。私はかつてあなたを裏切ったし、これからも裏切るかも知れません。しかし、私がどんなにあなたを愛しているかをあなたはご存知です」。そのペトロに主イエスは「私の羊を飼いなさい」と命じられ、キリスト教伝道を始めるのです。

かつて、主イエスを裏切った自分が赦され、それまで以上に愛し、愛される自分の存在を知りペトロは生れ変わったのです。ですから聖書の文脈ではペトロは決して強くはない、弱い人間として描かれています。しかしその弱さを知り祈り求め、その弱さが主イエスによって結果、むしろ強くされたのです。

その意味では私たちも、時として信頼関係を裏切る行動を取り、自己保身のため現実から逃げだす存在です。私たちも聖書に描かれるキリストの弟子であるユダであり、ペトロであると重ねて読み込むことも間違ってはいないのです。

主イエスは語られます。「目を覚ましていなさい」。つまり「目を覚ましていることができない」弱い私

たちがここにいます。主イエスは、苦しみの中でも自分を閉じられず弟子たちに、そして私達に弱さを見せて下さった。とするならば私達も特別に強い必要はないのです。ましてや取り繕ったり、大きく見せようと演技をする必要はまったくありません。ただただそのままの自分、弱い自分であってよい、そこにこそ神が働かれ、救いがある尊い豊かな「いのち」であるのです。

とするならば私達人間は、楽しいとき嬉しいときに神様に出会うのではなく、むしろ苦しみ、苦難を通して押し出されるようにして神様に出会うのではないでしょうか。まただからこそ、お互いの弱さを受け入れ、赦すことのできることこそが求められるのです。神様はその決して強くはない、弱い私たちを、常に祈りをもって招かれておられます。その神様の高く広く、深い愛に包まれて今日も一日を始めるのであります。

《祈り》

主なる神様、

礼拝のひと時を感謝いたします。この静かな礼拝において、心を開いて聖書の言葉を聴き、

自らを整え、豊かな歩みを続けさせてくださいますように。

主の御名によって祈ります。アーメン。

なくならないもの

中学校・高等学校　聖書科教諭　髙　アンナ

マタイによる福音書　二四章二九～三五節

29「その苦難の日々の後、たちまち
　太陽は暗くなり、
　月は光を放たず、
　星は空から落ち、
　天体は揺り動かされる。
30そのとき、人の子の徴が天に現れる。そして、そのとき、地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大
いなる力と栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見る。31人の子は、大きなラッパの音を合図にその天
使たちを遣わす。天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集め
る。」
32「いちじくの木から教えを学びなさい。枝が柔らかくなり、葉が伸びると、夏の近づいたことが分かる。
33それと同じように、あなたがたは、これらすべてのことを見たなら、人の子が戸口に近づいている

と悟りなさい。34はっきり言っておく。これらのことがみな起こるまでは、この時代は決して滅びない。
35天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

花や生き物のように、この世界にあるものはいつか必ず、枯れたり、壊れたり、なくなってしまいます。この世の中には、いつまでも続くものなんてありません。私たちの命も、私たちの大切な人の命もです。悲しいですね。

ときどき、世間では、あなたの前世は何々だ、とか、誰々の生まれ変わりだ、とか耳にすることがあります。けれども、聖書に、そのような教えはありません。前世も生まれ変わりもありません。みなさんは家族やお友達の誕生日をお祝いしますね。それは、たった一つの命だからです。みなさんは、この世界と歴史の中で、たった一つの命であり、たった一人です。「わたし」という存在は、わたし一人しかいません。「わたし」の命は、はじめがあり、終わりがあるのです。

私たちの人生の始まりを自分が始めたくて始めた人はいませんし、自分の終わりもまた、自分の意思で終われるものではありません。この命を、私たちを、誕生させてくださるのは神さまなのです。そしてこの命を終わらせるのもまた神さまなのです。

この世界にも、終わりがあります。勿論、世界が滅びるとか、地球が爆発するとか、そんなことではありません。誰かが、いついつ世界が終わるよ、こんなことが起きたら世界が滅びるよ、と預言するから終わるのでもありません。

けれども、たった一つ、なくならないものがあります。それが、イエスさまのお言葉です。イエス・キリストはおっしゃいます。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

神さまの愛とイエスさまの救いのお約束だけは、何があっても変わりません。ですから私たちは、恐れることはないのです。終わりがあるからといって、不安になったり、投げやりになる必要はないのです。

私たちは神さまのご支配の中にあり、イエスさまのお言葉が、みなさんを包みこんでくださるからです。そのイエス・キリストのお言葉が語られるのが、礼拝であり、教会です。

聖書には、はっきりと、終わりの日に、イエスさまが来てくださることが書かれています。イエスさまが来てくださって、すべての人たちがイエスさまを礼拝するようになるのだというのです。

二〇〇〇年前に来られたイエスさまによって、私たちの罪が赦され、神さまの子どもとされたことを感謝しつつ、再び来られるイエスさまを見つめて、礼拝をささげているのです。

この約束の言葉を信じて、イエスさまを待つことができるといいですね。

わたしは世の光である。
わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。

（ヨハネによる福音書　8：12）

わたしは復活であり、命である

榴ケ岡高等学校　宗教主任　西間木　順

ヨハネによる福音書　一一章二五節

25イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」

「命」という言葉を聞いて真っ先に頭に浮かぶことは、今私たちがこの世を生きるための命でしょう。しかしこの命は私たち自身が作り出すことができません。聖書は、神が特別な恵みによって、私たちに命を与えてくださっていると、教えています。

創世記二章七節に、「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」と書かれてあります。

私たちが今この時を生きているのは、神が私たちに命を与えて下さっているからです。それが、私たちが今生きている根拠、存在している根拠なのです。と同時に、私の命も、他者の命も、神が与えてくださったものなのだから大切していかなければなりません。一人一人の存在が貴いものなのです。

神から命が与えられていることに日々感謝し、神の教えを心に留めながら、一日一日を大切に生きていかなければなりません。

しかし私たちのこの世を生きるための命には終わりがあるのです。私たち誰もがこの世の歩みを終えて死を迎えることになります。私たちのこの世の命は、限られた時間なのです。

死ですべてが終わるのであれば、死と共に神との人格的応答関係が終わるのであれば、私たちの人生も空しいもの、無意味だと考えてしまうかもしれません。希望を持つことはできなくなってしまいます。

ヨハネ福音書一一章二五節で主イエスが言われた命は、この世を生きるために与えられている命とは同じではないことに気づくことができるでしょう。主イエスは死者の中から復活されました。主イエスの復活によって死が終わりではなくなったのです。主イエスは死の力に勝利されたお方なのです。復活された主イエスが、死の先に新しい命を与えてくださるのです。復活の主イエスによって神との関係が新しくさ

れるのです。この神との新しい関係は永遠に続くのです。これが救いなのです。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は死んでも生きる」。この主イエスのお言葉は救いについて語っているのです。

聖書は主イエスの復活について証言しています。と同時に、復活の主イエスと出会った人たちの変化についても証言しています。

主イエスが捕えられ、十字架につけられたとき、主イエスに従ってきた弟子たちは自分たちの故郷ガリラヤへ逃げ帰りました。十字架につけられたとはローマに対して反逆したことを意味します。弟子たちは、自分たちの先生の宣教活動は失敗に終わったと感じました。弟子たちは、先生と行動を共にしていた自分たちも捕えられて処刑されてしまうかもしれない。「まだ死にたくない」。絶望し身の危険を感じた弟子たちは、主イエスの教えを捨てて自分たちの故郷であるガリラヤへと逃げ帰ったのです。主イエスと共にしてきた生活を忘れようとしていたかもしれません。

ガリラヤに戻った弟子たちは、主イエスと共にしてきた生活を忘れようとしましたが、忘れることができなかったのです。忘れよう忘れようと思えば思うほど、かえって思い出されてしまう。彼らの故郷ガリラヤは主イエスが宣教活動をしてきた地域だったからでしょう。次第に、先生が死んでしまったことへの深い悲しみに包まれました。と同時に、先生を裏切ってしまった後悔の念にさいなまれていきました。彼らは生きる希望を見失ったのです。「自分たちは生きる価値がないのではないか」と自分自身を責めたのです。

そのような弟子たちが、「自分たちは、死者の中からよみがえられた先生と出会った」と言い始めたのです。この時に、「あの十字架につけられたイエスこそ、神の子、救い主である」という信仰が生まれた

のです。

復活された主イエスは、弟子たちの裏切りを責めたりはしませんでした。弟子たちの失敗を責めたりはしませんでした。

かえって「あなたは生きてよい」と語ってくださったのです。ですから弟子たちは、深い悲しみや後悔の念から立ち上がり、新しい一歩を踏み出したのです。

復活の主イエスと出会った弟子たちは、揺るぎない信仰を持つ者へと変えられたのです。主イエスの復活の力が、死の力よりも大きく感じたのです。主イエスの出会いによって、復活された主イエスの約束に希望を見出したのです。そしてその弟子たちは、エルサレムへと戻り、主イエスのことを、大胆に語りだしたのです。

今日の主イエスの言葉は、愛する兄弟を亡くし、深い悲しみの中にあるマルタに語られた言葉です。

深い悲しみの中にあるマルタのところに主イエスは近づいてこられて、「わたしは復活であり、命である」と言われたのです。「あなたが、信じるのであれば、死の力に勝利する私の救いが実現する」と主イエスは言われたのです。この主イエスの言葉は、マルタの慰めとなりました。主イエスの言葉によって、マルタは確かな信仰を持つ者へと変えられたのです。と同時に主イエスのお言葉に希望を持ったのです。

私たちは今、この世を生きていく中で、様々な不安があるでしょう。悩みがあるでしょう。自分はだめな人間なんだ、と自分自身を責めてしまうこともあるでしょう。しかし、そのような私たちに復活の主イエスは、出会ってくださるのです。そして生きる力を、生きる希望を与えてくださるのです。そして神との新しい関係の中で、人格的応答関係の中で生きるように、招かれているのです。

《祈り》

父なる神

新しい命を与えてくださり感謝いたします。

復活の主は、私たちに、「わたしと一緒に神の道を歩こう」と呼び掛けてくださっていますから、

私たちが、その復活の主の呼びかけに応えいくことができますように。

この地にあって、地の塩、世の光としての働きをしていくことができますように。

この祈り　貴い我らの主、イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン

疲れた者、重荷を負う者は、
だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。
わたしは柔和で謙遜な者だから、
わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。
そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。
わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。

（マタイによる福音書　11：28 － 30）

島崎藤村への父親の愛

院長・学長・宗教センター所長　大西晴樹

ルカによる福音書　一五章一一～二四節

11また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。12弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。13何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。14何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。15それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。16彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。17そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。18ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。19もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』20そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り

寄って首を抱き、接吻した。21息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』22しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。23それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。24この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

「放蕩息子の物語」といわれている聖書の箇所です。今日は弟の物語の部分だけを読みました。中東の威厳ある父親は、着衣を乱し、他人に裸足を見せて走り寄るようなことはありません。ここには父親の深い愛が述べられています。今日はこの聖書箇所そのものの解釈ではなく、東北学院に縁のある人物の話をすることにしましょう。

今年は、かつて東北学院の教師もしたことがある日本の文豪島崎藤村の生誕一五〇周年に当たります。藤村は、皆さんもご存知のように、森鴎外、夏目漱石と並んで明治の三大文豪に数えられており、生誕一五〇年を記念して、今年は間宮祥太郎主演の映画『破壊』が、残念ながら東北地方では上映会の予定がありませんが、各地で上映され、静かな人気を呼んでいます。

島崎藤村は、一八七二（明治五）年信州木曽の中山道馬籠（現在の岐阜県中津川市）で生まれました。郷土の期待もあったのでしょう。九歳にして上京し、一八八七（明治二〇）年、東北学院と同じプロテスタント・キリスト教の学校である明治学院普通部に入学し、一八九一（明治二四）年に卒業しました。

一五歳から二〇歳までの間です。

五年間の明治学院在学中、一・二年生の時の成績は、クラスでもトップでしたが、何らかの挫折が藤村を襲いました。藤村の自伝小説『桜の木の熟する時』には、このように述べられています。「心の闘いの結果は、覿面（てきめん）に卒業の成績にも酬（むく）いて来た。学校に入って二年ばかりの間は級の首席を占め、多くの教授の愛を身に集め、しかも同級の間での最も年少なものの一人であった彼も、卒業する時は・・・ビリから三番目ぐらいの成績で学校を出て行くことに成った」。この自伝小説では、近隣のミッションスクールの女子生徒との恋愛感情を描いていますが、私はそうは思いません。藤村自身明らかな進路変更をしたというのが真相のようです。すなわち、周囲の人々は実業家を期待し、藤村自身は政治家を夢見て、第一高等学校を受験したのですが、それに失敗して学業に力が入らなくなった。というよりも、成績だけを追いかけるような優等生的な勉強の仕方を改め、もっと広い意味での学問を志すようになったのです。その消息を藤村はこのように述べています。「自分等の前にはおおよそ二つの道がある。その一つはあらかじめ定められた手本があり、踏んで行けば可い先の人の足跡というものがある。今一つにはそれが無い。なんでも独力で開拓しなければ成らない。彼が自分勝手に歩き出そうとしているのは、その後の方の道だ。言いがたい恐怖を感ずるのも、それ故だ。心の闘いの結果は、・・・ビリから三番目ぐらいの成績で学校を出て行くことに成った。しかし、彼はそんなことに頓着しなくなった。他の学校に比べると割合に好い図書館が有り、自分の行く道を思い知ることが出来、それからまた管（戸川秋骨）や足立（馬場孤蝶）のような友達を見つけることが出来たというだけでも、この学窓に学んだ甲斐はあった」。藤村は、明らかに良い成績を収めることで学校を卒業したのではなく、近代文学をともに担うような友人

を見つけ、また大学の価値を卒業後も利用できる充実した図書館に見出して学校を卒業したのです。

藤村は明治学院在学中に、実はキリスト教の洗礼を受けていました。藤村が通っていた予備校である共立学校の英語の教師で、高輪教会の牧師でもあった木村熊二という牧師にして、教育者から一七歳の時に受洗しています。藤村のことを絶えず気にかけてくれていたのが木村熊二でした。木村は、九歳にして親元を離れて上京した藤村にとって、故郷で非業の死を遂げることになる父親以上に、父親のような存在でした。明治学院卒業後、藤村は、その木村熊二が創設し、教頭をしていた明治女学校に教師として就職します。しかし、学校を卒業した二〇歳そこそこの文学青年、日本の近代の夜明けという大きな時代の変化の中に置かれ、心の闘いを選んだ藤村の生き方は困難極まるものでした。教師となった藤村は、既に婚約者のいた教え子佐藤輔子への愛に苦しみ、明治女学校を辞し、教師としての自責の念から教会の籍を抜き、十ヶ月にわたる関西方面への漂白の旅に出ます。自殺も覚悟した藤村でしたが果たせず、一八九四年再び明治女学校に復職した藤村を待ち構えていたのは、彼ら文学青年の雑誌『文学界』の指導者であり、信頼を寄せていた北村透谷の自殺であり、田舎の兄の水道管事件に連座しての収監という事態でありました。追い討ちをかけるように、輔子の死、馬籠の生家焼失の知らせが届きました。こうして、一八九五年、再び藤村は、失意のもと明治女学校を辞職したのです。

藤村が東北学院の日本作文、並びに訳読の教師として仙台に赴任したのは、このような時でした。教師として宮城女学院から明治女学校へ移り、藤村の同僚であった小此木忠七郎が東北学院への就職を勧めてくれたのです。実は、藤村は仙台に、わずか十ヶ月しかおりませんでした。しかし、その間、仙台の自然の美しさと静かさ、東北学院の同僚のホスピタリティ、TG生への教育による充実感、図書館等の設備、

すべてが失意の下に来仙した藤村の心を癒し、藤村の才能を詩作へと開花させ、藤村の人生の「夜明け」と同時に日本近代詩の「夜明け」を作り出したのです。

まだあげ初めし前髪の　林檎のもとに見えしとき　前にさしたる花櫛の　花ある君と思ひけり

この有名な七五調の詩文を、皆さんは中学の国語で習ったと思います。この「初恋」という詩が収められている『若菜集』を藤村は仙台に来てから六ヶ月で書き上げ、『若菜集』を携えて再び上京しますが、生活は相変わらず大変でした。

そのような時、再び教師になることによって生活の道を拓き、創作活動が出来る環境を整えてくれたのも、木村熊二でした。当時木村は、伝道の地である長野県小諸において小諸義塾という旧制中学校を創設し、同校の塾長をしており、藤村を招聘しました。藤村は小諸で六年間過ごすことによって詩作という韻文から小説という散文作家の道を拓いていくことができたのです。藤村は明治女学校の卒業生で、函館出身の秦冬と結婚し、小諸で新婚生活を始めました。『千曲川のスケッチ』で事実描写という手法を打ち出し、大作『破壊』の執筆に着手し、日本を代表する近代小説家への道を用意したのは、この小諸時代です。

私は、藤村に洗礼を授けた木村熊二に、放蕩息子の父親の役割を見ます。明治女学校への就職も、間接的には東北学院への就職も、そして小諸義塾への就職も、すべて木村の導きでした。非業の死を遂げた父親に代わり、自ら教会籍を放棄するまでに問題行動を起こす放蕩息子の藤村を、衣服を乱してまで走り寄り、しっかり抱きしめてあげたのだと思います。そのたびに、心の闘いを推し進め、まだ先人が踏んだことのない道を選んだ藤村は、韻文である詩作の才能を開花させ、散文である小説家としての才能を開花させていったのです。

藤村の信仰については、彼の人生のその後の様々な行いから、キリスト教を棄教したとか、東北学院の同僚の美術の教師で、広瀬川の畔の同じ下宿で暮らしたことのある布施淡（あわし）から「アンチクリスチャンなれど一種の色ある人なり」と述べられています。藤村自身は自伝小説において、キリスト教についてこう述べています。「お前はクリスチャンか、とある人に聞かれたら捨吉（藤村）は早速以前浅見先生（木村熊二）の教会で洗礼を受けた自分と同じ自分だとは答えられなかった。・・・では、お前は神を信じないのか、とまたある人に聞かれたら自分は幼稚ながらも神を求めている者の一人だと答えたかった」。藤村は、たとえ教会に籍を置かずとも、苦難や失意のなかで神を求めていたのです。決して、棄教したとかアンチクリスチャンではありませんでした。

現代は、戦争、自然災害、感染症の蔓延、AIやデータサイエンスの普及により、「踏んで行けば可い先の人の足跡」などない時代を私たちは着実に歩んでいるのではないでしょうか。かつて藤村がそうであったように、そのような環境の中で、人間が成長していくためには、愛されること、信頼することが必要です。それによって、東北学院のスクールモットーであるLIFE、すなわち、「個人の尊厳」が担保されるのです。父なる神の愛は、聖書に記されているように深いものがあります。尖っており、過ちの多い藤村には木村熊二が寄り添っていたように、皆さんも、大学でゼミやサークルの中で形成される教員や友人との間の絆や信頼を大切にして、自らの道を切り拓いていってほしいと思います。

二〇二二年度　大学クリスマス礼拝説教

さあ、ベツレヘムへ

大学宗教部長・宗教センター主任　原田浩司

ルカによる福音書　二章八～二一節

8その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。11今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」13すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

14「いと高きところには栄光、神にあれ、
地には平和、御心に適う人にあれ。」

15天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。16そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い

葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。17その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。18聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。19しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。20羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。
21八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。

ここ東北・宮城県で暮らしている私たちにとって、東日本大震災は忘れ難い体験でしたが、今年はあの震災から数えて一一回目のクリスマスです。あの日、これまでの常識では到底考えられない、経験したこともない、強く長い揺れを経験しました。これまで経験したことのない巨大津波が町々を飲み込み、そして大勢の人々の尊い「いのち」が奪われるという、誰もこれまで経験したことのない出来事を経験しました。常識を超えたあの経験は、これからも一生忘れることなく語り継がれ、語り継いでいくことでしょう。

今、こうして皆さんと祝うクリスマスも、これまでの常識では到底考えられない出来事として、それは起きました。そして、歴史の中で綿々と語り継がれ、受け継がれ、そして忘れ去られることなく、祝い続けられてきました。

今年の大学のクリスマス礼拝は、ルカによる福音書二章からクリスマスの知らせを伝える天使たちと羊飼いたちに注目します。八節に「野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた」羊飼いたちが登場し

ます。この八節の時点では、彼らはまだ救い主、キリストの誕生を知りません。そんな彼らの前に主の天使たちが現れ、一一節で「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」と告げます。こうして羊飼いたちは初めて救い主（メシア）が誕生したことを知り、急ぎベツレヘムに駆けつけ、飼い葉桶に寝かされていた乳飲み子を探し当てました。この流れを踏まえ、まずは羊飼いたちの前に現れた「主の天使」に注目しましょう。

クリスマスの季節に歌われる讃美歌「荒野の果てに」には、ラテン語のまま日本語に訳されていない歌詞があります。「グロリア・イン・エクセルシス・デオ」この言葉は今日の聖書では日本語に訳されています。「いとたかきところには栄光、神にあれ」。これが「天の大軍」が、クリスマスの知らせとして伝えるメッセージです。しかし、天の大軍が歌う言葉はそれだけではありません「地には平和、御心に適う人にあれ」。「地には平和（パックス・イン・テラ）」があるように。それが神の御心であることが、クリスマスの夜に羊飼いが聞いたメッセージでした。

この二〇二二年は、改めて「地には平和」という神の御心に、世界中が思いを馳せるクリスマスとなりました。二月にロシア軍によるウクライナへの軍事侵攻が始まってから既に十ヵ月が経過し、長期化しています。世界がこの影響を被り、ウクライナ産の小麦粉の輸出が止まり、食糧難に陥るアフリカの諸国、燃料費の高騰によって物価が値上がりするなど、戦地から遠く離れた日本で暮らす皆さんにも戦争の影響は及んでいます。値上げラッシュはまだまだ続きそうです。ウクライナという遠く離れたよその地で起きた「他人事」ではないのです。同じ一つのこの世界に生きる、わたしたちに関わる出来事として見つめ直す必要があります。

まさにクリスマスも、自分とは関係のない「他人事」ではありません。日本で暮らす、クリスチャンではない皆さんにとってもそうです。この聖書に登場する羊飼いたちも、ひょっとすると、天使たちが告げるメッセージを、はじめのうちは自分とは関係のないことのような、「他人事」のような気持ちで聞いていたかもしれません。「いとたかきところ、天の神に栄光あれ、地には平和があれ」…「そんな大それた、壮大なメッセージを聞いても、わしら羊飼いは、来る日も来る日も、毎晩のように、ぐっすり眠れる布団もベッドもない、部屋もなければ屋根すらない。こうして家畜のために闇夜を野宿する日々の暮らしは、何も変わりはしない」。そんな、どこか諦めにも似たような暗い思いを抱いて暮らしていたかもしれません。でも、天使たちのメッセージは、クリスマスは他人事ではない、あなたのためのメッセージだと天使は羊飼いに語ります。「今日、ダビデの町に、あなたがたのために、救い主がお生まれになった」。クリスマスはあなた方一人一人のため、一人一人のあなたのためである。救い主メシアキリストがお生まれになったのは、あなたのため、わたしのためである。クリスマスは他人事ではないことを、天使は「羊飼いたち」に告げます。改めてそのことに気付いた羊飼いたち、「このわたしのためのクリスマスである」ことに気が付いた羊飼いたちの反応に注目しましょう。

羊飼いたちは「夜通し」羊の群れの番をしていたのです。ですから、彼らは長い間、夜の闇の中に身を置いていました。実はまさにその「暗黒」こそ、彼らの日常、彼らの人生を象徴していると言えます。彼らの「いのち」は闇に覆われていたのです。彼らが生きていた当時のイスラエル社会における羊飼いという職業は、羊たちの「飼い主」としての畜産農家、つまり家畜を自分の財産として保有しているのではなく、御主人さまが保有し、飼っている羊たちのお世話をするために雇われた職業でした。ですから、御主

人が飼う羊の家畜動物のお世話をする、言い方を多少露骨に言い換えれば、「家畜に奉仕する奴隷」であるという具合に、人々から軽蔑される職業でもありました。改めて、彼ら羊飼いたちは、昼間の明るい時間・空間を生きるのではなく、昼夜逆転し、夜通し働く、つまり闇の中を生きている。それが彼らの暮らしであり日常でした。最初のクリスマスの知らせは、そんな暗闇の中を生きる、暗黒の時間と世界に身を置く彼ら、羊飼いの許に届けられます。

クリスマス。それは、彼らを闇の中から立ち上がる力を与える出来事でした。「さあ、ベツレヘムへ行こう」。羊飼いたちは互いにそう語り出します。ベツレヘムという、自分たちの新しい目的地が、クリスマスを知らせる天使たちのメッセージから産まれました。闇の中にいる者を奮い立たせ、目的地を目指して、前進する力を与える、それがこの聖書に記される最初のクリスマスが示す出来事です。

皆さんの中には、ひょっとすると羊飼いたちのように暗黒のような現実から抜け出せないような、心が暗く沈み、時に諦めのような思いを抱き、落ち込むこともあるかもしれません。ですが、そんな闇を代表する羊飼いたちが、立ち上がり、声を挙げ、そして目的地に向かって駆け出します。「さあ、ベツレヘムへ行こう」。これは羊飼いたちが発した、闇から光への方向転換を遂げた言葉、羊飼いの仲間同士が互いに奮い立たせた言葉です。今ここにいる私たちにも、戦争が終わらないこの世界にも、この言葉、わたしたちを奮い立たせる言葉が必要です。「さあ、ベツレヘムへ行こう」。目的地を目指して、前進していく掛け声です。「さあ、」わたしたちも、わたしたちそれぞれのベツレヘムへ向かって進んでいきましょう。あなたのベツレヘムはどこですか？

命のある限り　恵みと慈しみはいつもわたしを追う。
主の家にわたしは帰り　生涯、そこにとどまるであろう。

（詩篇　23：6）

良く生きること

宗教センターチャプレン　野村　信

マタイによる福音書　二一章三三～四六節

「ぶどう園と農夫」のたとえ

33「もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がぶどう園を作り、垣を巡らし、その中に搾り場を
掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。34さて、収穫の時が近づいたとき、
収穫を受け取るために、僕たちを農夫たちのところへ送った。35だが、農夫たちはこの僕たちを捕まえ、
一人を袋だたきにし、一人を殺し、一人を石で打ち殺した。
36また、他の僕たちを前よりも多く送ったが、農夫たちは同じ目に遭わせた。37そこで最後に、『わたし
の息子なら敬ってくれるだろう』と言って、主人は自分の息子を送った。38農夫たちは、その息子を見
て話し合った。『これは跡取りだ。さあ、殺して、彼の相続財産を我々のものにしよう。』39そして、
息子を捕まえ、ぶどう園の外にほうり出して殺してしまった。40さて、ぶどう園の主人が帰って来たら、
この農夫たちをどうするだろうか。」41彼らは言った。「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶど
う園は、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに貸すにちがいない。」

42イエスは言われた。「聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか。
『家を建てる者の捨てた石、
これが隅の親石となった。
これは、主がなさったことで、
わたしたちの目には不思議に見える。』
43だから、言っておくが、神の国はあなたたちから取り上げられ、それにふさわしい実を結ぶ民族に与えられる。44この石の上に落ちる者は打ち砕かれ、この石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」
45祭司長たちやファリサイ派の人々はこのたとえを聞いて、イエスが自分たちのことを言っておられると気づき、46イエスを捕らえようとしたが、群衆を恐れた。群衆はイエスを預言者だと思っていたからである。

マタイによる福音書に記される主イエス・キリストの譬話です。内容は、わかりやすい譬えです。すなわち、旧約聖書の時代には、神の教えを告げる預言者たちが、昔から幾人も登場しましたが、彼らはしばしば迫害されました。ところで、今、神から遣わされた主イエスが人々に神の教えを語っていると、敵対する祭司長やファリサイ派の人々は主イエスを殺そうとたくらんでいます。そこで主イエス自ら、この譬えを通して人々に警告しています。

しかし、彼らは、この警告を聞いても主イエスを捕まえ、殺そうとたくらんでいるのですから、恐ろしいといえます。この譬えは、そのように主イエスが、自らの行く手を自ら予告している譬えですが、本日は、この譬話の最初の部分に注目したいと思います。

それは、この譬話の中に登場する家の主人は、なぜ旅に出たのだろうかという点です。もう一点気になるのは、この葡萄園を作ったのは、この家の主人で、家にいる僕や労働者たちに作らせたのではないという点です。さらに、農夫たちは、このぶどう園を主人から借りており、ここで葡萄を育て、労働するように雇われているという点です。

この譬えの主旨は先に申しましたように、最後に明瞭に告げられていますが、最初の部分においても大切なことが語られています。すなわち、ここには、旧約聖書の創世記にある、神の天地創造の様子を彷彿（ほうふつ）させられるからです。つまりぶどう園とは、この世界であり、この世界は神によって創られたのであり、しかも、垣をめぐらし、搾り場が掘られ、見張りのやぐらが立てられ、とても良く整えられた世界が造られたことを示唆しています。

確かに私たちの世界は観察してみると、実によく整った秩序と規則性を持っています。皆さんも感じているでしょう。時間がどうしてあるのか。時は正確に進んでいます。私たちの体の構造を見ても、遺伝子一つとっても素晴らしい規則性をもっています。目を宇宙に向けて星や月を観察しても、どの一つも見事な調和、秩序、規則性をもっているわけです。よく整えられた世界で私たちは生活していることを感じない人はいないと思います。

何か大きな目的をもって、意図的にこの世界が造られたとしか考えられませんし、私たちは、創造主な

る神がおられ、神がこの世界の造り主であると聖書から教えられます。

しかしその創り主なる神は、この世界からそっと身を引いていて下さる。すなわち、私たち人間がこの世界で主体的に、積極的に生きて生活できるように、引き下がっていてくだるということです。しかも、私たちは、みな仕事をしながら生活し、平和で幸せに生きていけるようにこの世界を神様からお借りしているわけです。

この譬えでは、主人は旅に出たとあります。これは、主人がぶどう園を、いわばほったらかして旅行に出かけたというより、農夫たちがよく働き、耕してくれるだろうと彼らを信頼し、期待していてくださるというメッセージなのです。

しばしば、「神はどこにいったのか」、「神などいない。いるなら見せてくれ」と言う人がいますが、実は、神が見える、傍らにいる、という仕方で御自身を示してくれたら、もはや人間には自由はありません。主体性も、積極性もありません。主人の僕であり、使用人であり、いわば奴隷という有無を言えない、単に働く動物になってしまいます。

さて、この譬えは、先に申しましたように、農夫たちは、神から遣わされた預言者たちを迫害し、さらに主イエス・キリストを殺して、この農園を自分たちのものにしてしまうという恐るべき暴挙に出たわけです。しかし、これはキリストの時代だけの話ですますわけにはいきません。すなわち、キリストは、この死を通して、むしろ私たちが想像していなかった、おどろくべき神の愛を人類に明らかにしてくださいました。すなわち人間の罪を十字架の死を通して贖い、その結果人間を神様の前で義（ただ）しいと受け止めてくださるという、とてつもない恵みです。私たち人類は、この世界の造り主で、主人公なる神様が、

逆らい、反抗さえする私たちを愛していてくださるということを学んだわけです。

しかしそれから、二〇〇〇年たって、今も「世界の主人公は私だ」と言わんばかりに、人間があたかも支配者、あるいは神のようになり、自分の財産や領土を強引に広げ、自分でこの世界をどうにでも出来ると思い込んでいる様子があります。有無を言わせない圧政や弾圧、あるいは理性中心主義や科学万能主義もその傾向をもっています。現代起きている戦争は、これからも起きるかもしれない戦争も、まるでぶどう園には主人などいない、自分たちが主人であると言って、頂点に立とうと互いに争い、あるいは相手を降伏させ、いつまでたっても終わることがない争いを続けています。

なるほど、世界にはどんな団体でも、国家でも、秩序を保つためにはある程度の上下関係が必要です。しかし自分がこの世界の主人になろうとか、あるいは自分の国さえよければよい、他はどうでもよい、という優越主義は、まさにこの譬えが警告している点です。逆に、自分には生きる価値がないとか、人生の目標や意味もわからないと言って、この世界に背を向け、自ら去っていくことも望まれていないことが分かります。

私たちは、この世界を、三三節にあるように、お借りしているのです。ここで生活し、労働して、良い実を結ぶようにと、この世界に住まわせていただいているのです。

世界を造って、私たち人間をこの世界に置いてくださった神様は、私たち皆が、多少のでこぼこや違いはあっても、平和で共生した社会の中で、良く生きるように求めておられます。引き続き聖書からよく教えられ、神様からお借りしている私たちの大切な世界を大切にし、それぞれの歩みを誠実に果たし、幸いな営みを続けていきたいと願います。

私は道であり、真理であり、命である。

（ヨハネによる福音書　14：6）

モーセにおける神の啓示 - 存在と認識の一致をめぐって

大学総合人文学科長　川島堅二

出エジプト記　三章一三～一四節

13モーセは神に尋ねた。
「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがいありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」
14神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」

テモテの手紙二　二章一一～一三節

11次の言葉は真実です。
「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、

キリストと共に生きるようになる。
12 耐え忍ぶなら、
キリストと共に支配するようになる。
キリストを否むなら、
キリストもわたしたちを否まれる。
13 わたしたちが誠実でなくても、
キリストは常に真実であられる。
キリストは御自身を
否むことができないからである。」

モーセの生涯については後述しますが、四〇年前に過失から殺人事件を起こしエジプトを離れたモーセは、ふたたびエジプトに行き、そこで奴隷として酷使されているイスラエルの人たちに対面することになる。そのときに「あなたたちの先祖の神が、わたしを遣わされた」と、四〇年という空白の後に、そのように言っても、「お前は一体何者か。神に遣わされたというがその神の名は何か」と訝しいまなざしで問われるのは目に見えている。その時どのように応えられたらよいかとモーセは神に問うのです。

それに対する神の答えは次のようなものでした。（出エジプト記三：一四）

「神はモーセに、『わたしはある。私はあるという者だ』と言われ、また、『イスラエルの人々にこう言

うがよい。『私はある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと」

この節は、いくつかの理由で解釈が非常に難しい。

第一に「神の名」として告げられるその内容が意味のよくわからない内容であること。

すなわち「わたしはある。私はあるという者だ」

これはいったいどういう意味なのか。このような名の神は、前代未聞、聖書にもここだけにしか出てこない表現です。

第二に、モーセは「イスラエルの人々に『私はある』という方が、私を遣わされた」と言えと言われるのですが、この後、エジプトでイスラエルの人々と再会した時に、このようなことを語ったとはどこにも記されていません。

むしろ、モーセが語るのは続く一五節に言われている神の自己紹介

「イスラエルの人々にこう言うがよい、あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主が私をあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえに私の名、これこそ、世々に私の呼び名」

これをモーセは語ります。たとえば次のような個所です。

出エジプト記六：二～八「神はモーセに仰せになった。『私は主である。私は、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れた・・・わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると手をあげて誓った土地にあなたたちを導き入れ、その地をあなたたちの所有として与える。私は主である』」

この「わたしはアブラハム、イサク、ヤコブの神、主」という神の自己紹介、神の名は、創世記の族長

時代にさかのぼり、族長たちの信仰の歩みにおいて形成されてきた神の名に他なりません。たとえば三代目の族長になるヤコブが、兄に命を狙われて家を離れ、一人旅先で石を枕に寝ていた時に夢の中に神が現れたときの神の自己紹介は以下のようでした。

創世記二八：一三「わたしは、あなたの父祖アブラハム、イサクの神、主である」

したがって、出エジプト記の三章一三節のモーセの問いに対して、一四節ではなく、すぐに一五節が来るのであれば、非常にすっきりと分かる。つまり、族長時代からイスラエルの人々に何百年にもわたって慣れ親しんできた神の名、神の自己紹介「あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた」そう言うがよいというのであれば、すっきりと筋が通る。

では、一四節の「私はある。私はあるという者だ」という神の名、神の自己紹介はどのような意味があるのでしょうか。

この箇所の原文（ヘブライ語）を直訳すると以下のようになる。

I am who I am.

最初のI amは、中学生が最初に習う自己紹介の英文。I am a boy. I am Japanese.

自己認識を表すI amです。

それに対して、後者のI am.は、存在、「私はある」「私は存在している」という意味です。したがって、この箇所は「『私はある』という者だ」という訳になる。

これはどういう意味なのか。I am a boy. I am Japanese.なら立派な自己紹介ですが、I am who I

am. とはどのような意味があるのでしょう。

少し哲学的に言い換えると、この文章が表しているのは自己認識が自己存在と一致している状態です。哲学では一般に認識（思考）と存在が一致していること、これを「真理」と定義します。

たとえば「猫」という思考（概念）が、実際の猫という存在を示していれば、真ですが、「猫」と言いながら実際には犬という存在を指していればそれは偽りとなります。

私は「認識と存在が一致している者だ」として神はモーセに現れたということです。

この神の自己紹介は、これからモーセが遣わされようとしているイスラエルの人々にとっては何の意味もありませんが（実際、この神の自己紹介をこの後、モーセがイスラエルの人々に語った形跡は皆無）、エジプトの王子として四〇年、ミディアンの荒野で羊飼いとして四〇年生活し、齢（よわい）八〇歳となったモーセには、実は電撃のように彼の全存在を揺るがす啓示でした。この神の自己紹介、自己啓示に触れて、モーセはエジプトに再び赴く決意をしたといってもよいくらいの強い促しをモーセに与えるものでした。その理由は、モーセの生涯を振り返ることによって明らかになります。

モーセの生涯は一二〇年、それは以下の三つに分けられます。

Ⅰ期（〇～四〇歳）エジプトの王子として

Ⅱ期（四〇～八〇歳）荒野の羊飼い

Ⅲ期（八〇～一二〇歳）エジプトで奴隷であったイスラエルの人々の解放者

この神との出会いは第Ⅱ期の終わり、モーセ八〇歳の時の出来事です。

そして、四〇歳までの第Ⅰ期においても、八〇歳までの第Ⅱ期においても、モーセのありようは自己認

識と自己存在が一致しているI am who I am. ではなく、I am not who I am. 状態でした。

第Ⅰ期、自分の認識としてはエジプトの王子だったが、実の存在は、奴隷であるイスラエル人の子だった。第Ⅰ期の終わりはイスラエル人としての民族意識に目覚めたモーセが同胞のためにとしてイスラエル人を鞭打つエジプト人を殺すというエピソードで幕を閉じる。

第Ⅱ期、人殺しとしての過去にすべて蓋をして、自己認識としては、荒野で出会ったミディアンの祭司の娘ツィポラの夫であり、仕事は羊飼いであった。齢八〇を迎えてモーセは、おそらく自分の生涯はこれで終わると思っていたのではないか。しかし、その状態もまたI am not who I am. です。人を欺くことはできても、自分の心の深いところでは殺人者としての自己存在との間で、深い亀裂の闇を抱えていたからです。

そのようなモーセに啓示された神のことばそれがI am who I am. でした。わたしは認識と存在が一致している真実そのものだとして神はモーセに現れたのです。これこそ、モーセが心の底で求めていたものだった。この神の自己啓示によって、モーセは、改めて自分の過去と向き合い、自分の存在そのものと向き合い、それをすべて自分で再認識するとともに、自分がイスラエル人であること、過去に殺人を犯したこと、妻や家族にすべて打ち明けて、エジプトへと赴くことになったのです。

このモーセの姿から、私たちは多くのことを学ぶことができます。

（1）神の啓示には二種類あるということ、すなわち公のものと、私一人のための啓示です。モーセの場合、公の啓示は「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主」ですが、モーセ個人への啓示は「わたしはある。私はあるという者」です。

私たちの場合は、公の啓示はたとえば「使徒信条」の内容です。それはキリスト教徒が公に信じ告白している神、キリスト、聖霊、そして教会への信仰を表現しています。

しかし、神の啓示はこれに尽きるのか。この神が、私たちの人生の節目節目において、右へ行くか左へ行くか、進むか、退くか、そうした決定的な地点において、わたしだけに分かる仕方で啓示された経験をキリスト者であればだれもが持っているのではないか。否、それがなければキリスト者とは言えない、そういう個人的な神の自己啓示、それは他の人には何の意味がなくとも、この私にとっては決定的な意味のある啓示です。

（2）自己認識と自己存在が一致するまでには非常に長い時間がかかるということ。モーセの場合は八〇歳にしてようやくです。

（3）自己存在の闇、深淵と向き合うためには神の啓示が必要ということ。

私たちは自己の存在そのものをその闇（罪）の部分を、自分自身の力では認識できない。神の真実な啓示に支えられて初めて私たちは自らのありのままの姿に向き合うことができる。

「私はあるという者」というモーセへの神の自己啓示、これの新約に対応する箇所があるだろうか、と考えたときに思い浮かんだのがテモテⅡ、二：一一～一三です。とくに一三節「キリストは常に真実であられる。キリストはご自身を否むことができないから」

「自分を否むことができない」つまりキリストにおいては自己認識と存在がつねに完全に一致している。そういう意味で真実なお方である。そのお方によって、私たちも自己存在の闇に、自分の罪にしっかりと向き合うことができる。福音的な言い方をするならば、わたしたちは自分の罪の深さを自分自身で認識す

ることもできなければ、それを直視することもできない。ただ十字架にかけられたキリストの姿を仰ぎ見ることによって、そこに自分の罪の深さ、心の闇の深さを認識すると同時に、それに対する赦しを認識することができる。このキリストの真実にあずかることによって、私たちも自己認識と自己存在が一致する。そこから真実な生が、自分を偽ることなく生きる人生が拓けてくるのです。

キリストの体のイメージを心に描いて生きる

大学宗教主任　出村　みや子

コリントの信徒への手紙一　一二章一二～二六節編

12体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、
キリストの場合も同様である。13つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギ
リシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼[バプテスマ]を受
け、皆一つの霊をのませてもらったのです。14体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成ってい
ます。15足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくな
るでしょうか。16耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部
でなくなるでしょうか。17もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、ど
こでにおいをかぎますか。18そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたの
です。19すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。20だから、多
くの部分があっても、一つの体なのです。21目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、
頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。22それどころか、体の中でほかよりも弱

く見える部分が、かえって必要なのです。23わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとします。24見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。25それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。26一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

キリスト教は神に対する愛と共に、隣人への愛を大切にしており、東北学院大学は「イエス・キリストに倣う隣人への愛の精神を養う」教育を建学の精神としてきました。本日私たちに与えられた聖書は、使徒パウロがコリントの教会に宛てた手紙の一節です。ここでパウロは、多様な人種、宗教、ジェンダーを生きる当時の人々の状況を視野に入れながら、「キリストの体」のイメージを描いていますので、ご一緒に学びたいと思います。

前半の一二～二六節は、パウロがキリストの体としての教会共同体のイメージを、人間の身体の構成部分の働きのアナロジーを用いてわかりやすく説明している箇所です。まず一二節でパウロは、「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である」と述べています。そしてキリストの体としての教会共同体を有機的に一つの体としてイメージするならば、そこには民族的差別も、身分的差別もないはずだと言っています。皆さんが世界史で

学ばれたように、キリスト教が広まった古代地中海世界は奴隷制を基盤とした厳しい身分社会であり、社会的地位や階層、ジェンダーによる差別が人々の日々の生活を縛っていました。なぜ当時のローマ帝国の身分制社会の中で、使徒パウロはこのような革新的なメッセージを大胆に主帳できたのか、皆さんは不思議に思いませんか。

パウロはその根拠を一三節で次のように述べています。「つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと（ここで人種差別が否定されています）、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと（ここで当時の地中海世界の奴隷制度における身分差別が否定されています）、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊を飲ませてもらったのです」と。ここでパウロは、洗礼を受けた者たちはキリストにおいて一つの体となり、キリストにおいて皆平等となるのだと述べています。なぜなら体は様々な機能を持つ多くの部分から成りますが、体としての統一性を保っているように、キリストを信じる者の共同体においては、それぞれ目に見える様々な違いはありながらも、キリストにおいてそうした多様性を互いに尊重し合うことが出来るようにされたと主張しているからです。

次にパウロが、キリストの体である教会共同体においては、ごく一部の人々の働きだけが重要視されるのではなく、互いに異なる多くの部分がそれぞれに、他には置き換えることが出来ない固有の存在意義を持っていると述べていることも重要です。一四節をご覧ください。パウロは「体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、『わたしは手ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が、『わたしは目ではないから、体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか」と述べ、そして一七節以下で「もし体全体が目だったら、どこで聞

きますか。もし全体が耳だったら、どこでにおいをかぎますか」と非常に興味深い議論を展開しています。パウロは、こうした身体機能の一つ一つにその固有の役割を与えているのが創造主なる神の業であることを人々に伝えているのです。身体の一つ一つの機能には優劣はなく、そのいずれが欠けても身体がうまく機能することができないように、キリストの体としての共同体を構成する一人一人に神からそのかけがえのない役割や使命が与えられていることを示しているのです。

ところで、パウロが告げる「キリストの体」のイメージがどうして今日の日本社会において重要なのでしょうか。先に述べたように、パウロの時代のローマ帝国は奴隷制を基盤とした階層社会でしたから、社会的差別や貧困に苦しむ人々はこぞってパウロの告げるメッセージを文字通り福音、良き知らせとして受け入れ、地中海世界の各地にキリスト教が急速に広まってゆきました。現代日本は目に見える形の階層社会ではありませんが、非正規雇用の拡大、ジェンダーに関する差別とそれに伴うシングル女性や一人親世帯の低所得等の経済格差が大きな社会問題となっています。コロナ禍もあって、それぞれが置かれた場所で漠然と生き辛さを感じている人は決して少なくありません。

それを示すのが、今年の三月に発表された二〇二二年度「世界幸福度ランキング」です。幸福度ランキングとは、「幸福度」という目には見えないものを数値化して順位付けしている点に特徴があり、各国の幸福度は主に「主観的な幸福度」によって決定されるという前提のもとに、国連機関である持続可能開発ソリューションネットワーク（SDSN）が毎年発表している統計的指標です。日本は五四位で、昨年の五六位からわずかに上昇しましたが、上位を占める欧米の先進国に比べて幸福度は低く、ここ数年は五〇位台で推移しています。様々な分析がなされていますが、日本は島国であるために、歴史的に多様な民族

との共生に慣れておらず、他の国々に比べて同調圧力が強いことも、人々の幸福度を下げている要因です。よく「空気を読め」とか、「みんなそうしている」といった言葉が聞かれますが、そうした明確な根拠のない同調圧力が、現在いじめやパワハラなど、様々な社会問題を引き起こしているように思います。学生の皆さんの中にも、これまで中学や高校で周囲の仲間に合わせようと無理をしたり、突然グループから排除され、いじめを受けた経験を持つ方も少なくないと思います。

社会には様々なグループ集団が存在し、皆さんもそれぞれ日常生活のさまざまな局面で、家族や学校、サークル活動等に所属していることと思います。その際集団運営がうまくなされている場合はよいのですが、時に集団内の派閥争いや不当なハラスメントに発展する場合も少なくありません。大学生活は、皆さんが今後社会で活躍する前段階ですから、そうした対立やハラスメントを超えてグループをまとめ、結束させる努力をすることは、皆さんの今後の人生にとって貴重な経験となるにちがいありません。皆さんがリーダーとしてグループをまとめ、結束させようとする際にぜひ思い起こしていただきたいのが、二一節以下のパウロの言葉です。

パウロは、「目が手に向かって『お前は要らない』とは言えず、また、頭が足に向かって『お前たちは要らない』とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです」と述べています。わたしたちは、目が痛くなれば目薬を使ったり、眼科に行ったりして目をいたわります。日頃は意識しませんが、目がうまく機能しない時になって初めて、目が日常生活においてどんなに大切であるかに気付かされますし、スポーツなどで足にけがをしたときになって初めて足の歩行機能の大切さに気付くものです。そのように、もしわたしたちが様々な集団のなかで、弱く見える人に対して、「お

前はもう要らない」などと冷たい言葉を発するのではなく、共同体のかけがえの無い構成員として認め、むしろ暖かで思いやりに満ちた言葉を隣人に投げかけるように心がけるならば、そうした人が一人でもいるグループは活性化し、その雰囲気は格段によくなることでしょう。

二四節以下でパウロは、「神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶのです」と述べて、キリストにある共同体のあるべき姿を描いています。成立当初の小さな教会は、イエス・キリストの示された隣人愛に倣う、相互の思いやりと配慮に満ちた群れであったことでしょう。

東北学院大学で学ぶ学生の皆さんには、多様性へのまなざしのもとに「キリストの体」がパウロによって伝えられたことを心に留めて、異なる様々な価値観やお互いの違った生き方を認め合い、一人一人の人権や個性が尊重されるような社会集団の形成を目指していって頂きたいと思います。

いのちの源

大学宗教主任　木村純二

箴言　四篇二〇～二三節

20わが子よ、わたしの言葉に耳を傾けよ。
わたしの言うことに耳を向けよ。
21見失うことなく、心に納めて守れ。
22それらに到達する者にとって、それは命となり
全身を健康にする。
23何を守るよりも、自分の心を守れ。
そこに命の源がある。

今日は「いのち」ということについて考えてみたいと思います。

現代では医学が発達して、日本では平均寿命が八十歳を越えています。長生きするのは大変すばらしいことなのですが、一方で様々な問題も生じています。その一つに延命治療の問題があります。延命治療というのは、高齢により身体の機能が低下した時に機械の力でその機能を代行し、延命を図る医療技術のことです。例えば、腎臓の機能が低下して排泄が適切にできなくなると、人工透析によって体内の老廃物を取り除き、血液を浄化します。また、自力で食事ができなくなった時には、直接胃に管をつなぐなどして人工的に栄養を補給します。あるいは、自力で呼吸できない時には人工呼吸器を使います。近年、こうした延命治療を拒否しようという考え方が広まって来ました。新聞やテレビなどのマスコミ、あるいは医学会、また厚生労働省などの行政府といった様々な立場から意識調査が行われていますが、どのアンケートでも、延命治療が必要になった場合、その処置を望まないと回答する人が八割を越えています。

その際、問題となるのが、「クオリティ・オブ・ライフ」という考え方です。頭文字を取ってQOLと言い、日本語では「生活の質」と訳されることが多いですが、今はより端的に「生命の質」「いのちの質」と訳しておきたいと思います。「クオリティ」の対概念は「クオンティティ」、「質」に対して「量」が対概念となります。延命治療で言うと、低下した身体の機能を機械で代行することで、なるべく量的に長い時間、身体の活動を維持させようとするわけです。延命治療を拒否しようとするのは、呼吸・栄養摂取・排泄といった、生きていく上で必要不可欠な生理的機能を機械に代行させてまで、身体を維持する時間の「量」を延ばしてゆくことよりも、量的には短くても、生きていることの「質」「クオリティ」を大事にしたいと考えるからです。

それでは、その「クオリティ・オブ・ライフ」、「いのちの質」というのはいったい何なのでしょうか？今、どうやら身体の機能を維持することの中に、いのちの一番の本質があるわけではなさそうだということが分かりました。身体の中にないとすると、心というものが考えられます。そこで、別の例を考えてみます。

人間が他の人間に暴力を振るうことがあります。学校における教師の体罰、生徒間でのいじめ、あるいは家庭内での虐待など、残念なことに陰惨な事件がたびたび報じられます。以前は、直接身体的な暴力を振るわなければ問題として取り上げられなかったのですが、近年では、体に物理的な暴行を加えなくても、言葉や態度によって相手の心を傷つければ、暴行として処罰の対象とされるようになって来ました。場合によっては、体の傷よりも心の傷の方が治癒しがたいことがあるという理解も、ずいぶんと広がったように思われます。その意味で、「心が殺される」という表現も決して比喩で言っているのではなく、心の傷がいのちに直結する場合があるわけです。

福音書には、イエスが病を癒す奇跡の話が数多く載せられていますが、現代医学がしていることを医学の力を用いずに実現したという点に奇跡の本質があるわけではありません。例えば、イエスは重い皮膚病の人の体に触れ、病を癒しましたが（ルカ五章など）、この皮膚病は単に体の病気として扱われたわけではなく、宗教的な穢れと見なされていました。それゆえ、皮膚病にかかった人は隔離され、穢れた存在として忌み嫌われていたのです。彼らの体に直接触れるというイエスの振る舞いは、単に体の病を癒すだけでなく、長年差別され傷ついていた心を癒すものでした。皮膚病の体に触れることは、死にかけた彼らの心に希望を与え生き返らせるという意味で、まさにいのちに触れる奇跡の業だったわけです。

少し体の方を軽んじてしまったので、念のために確認しておきますが、もちろんいのちにとって体は大切で、決して体のことをおろそかにしてよいわけではありません。ここで言っているのは、体を医学的にどれほど解剖したところで、「いのち」というものが見つかるわけではないということです。心臓が止まれば人間は死んでしまうのですが、心臓という臓器が「いのち」なわけではありません。また、近年では脳死という考え方も導入されていますが、脳死が人の死だとしても、脳が「いのち」なわけでもありません。その意味で、「いのち」というのは物質ではないのです。心が問題になって来るのは、「いのち」というものは、何らかの物質として確保できるものではなく、その存在を心で感じ取るものだからなのだと思います。

みなさんは、友人と一緒に部活動や学校行事に熱心に取り組んでいる時、あるいは仲間とふざけ合っている時、また恋人と共に過ごしている時など、何か「今この瞬間自分は生きているんだ」と感じたことが、これまでの人生で一度はあるのではないでしょうか。あるいは、近しい人やかわいがっていたペットなど、生き物の死に直面して、「今、一つのいのちが取り戻しようもなく失われた」ということを感じたこともあるかもしれません。「いのち」というものの存在は、そうした瞬間に感じ取るのでなければ分からないもので、どれほど言葉を尽くして説明したところで、最後は自分で感じ取るほかありません。

今日の聖書個所、「箴言」四章の二三節をもう一度お読みしておきます。「何を守るよりも、自分の心を守れ。そこに命の源がある」。いのちとは何だろうと考えて、その本質、源をたどってゆくと、「命の源」を感じ取る「心」というものに出会います。いのちを大切にしようと思ったら、もちろん体も大事ですが、「まず何よりも自分の心を守れ」、そう聖書は教えています。

ここでいのちの始まりについて見ておきましょう。『旧約聖書』「創世記」の二章七節には、「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」と書かれています。神が造られた最初の人は土から造られ、ヘブライ語で土をアダマというのでアダムと呼ばれています。人が土から造られたというのは、おかしな話に聞こえるかもしれませんが、人は死んだら土に返ります。「創世記」三章一九節には、「お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵にすぎないお前は塵に返る」と書かれています。死んだら土に返るものが土から造られていると考えるのは、実はさほど突飛な考えではありません。しかし、土をこねて形にすれば人間ができるわけでないのも当然のことです。だからこそ、「神は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」と書かれているわけです。物質的な身体だけでは、本当の意味で「生きる者」とはなっておらず、神がいのちの息吹を吹き込むことで、初めていのちはいのちになるのです。

この、神が吹き込んだいのちの息吹は、聖書の別の言葉で言えば「霊」です。現代日本語で「霊」と言うと何だか「幽霊」を思い浮かべるかもしれませんが、英語で言えば“Ghost”ではなく“Spirit”のことです。「霊」について語った別の聖書個所を見ておきましょう。今度は『新約聖書』「ヨハネによる福音書」六章六三節です。「命を与えるのは〝霊〟である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。」

ここでも、いのちについて考える際、肉すなわち人間の体のことを考えたところで何の役にも立たないので、霊に目を向けなければならないと語られています。そして、その霊は神から吹き込まれ、与えられ

ているのだと聖書は語っています。肉体として存在する人間が、自分で自分の霊を作ることができるわけではないのです。

いのちというものは当たり前に知っているように思えて、ちゃんと考えようとすると、実は大変難しい問題なので、この短い礼拝の時間ですべてを語り尽くすことはとうていできません。今日の所は、本当にいのちを大切にしようと思ったら、体だけではなく、それ以上に心を守られなければならないということ、いのちの本質は自分の心で感じ取るべきものであること、そしていのち、またその本質となる霊は神から与えられていること、これらのことを聖書の教えとして覚えていただきたいと思います。

憩いの汀に

大学宗教主任　田島　卓

詩編　二三編

1 賛歌。ダビデの詩。
主は私の羊飼い。
私は乏しいことがない。
2 主は私を緑の野に伏させ
憩いの汀に伴われる。
3 主は私の魂を生き返らせ
御名にふさわしく、正しい道へと導かれる。
4 たとえ死の陰の谷を歩むとも
私は災いを恐れない。
あなたは私と共におられ、
あなたの鞭と杖が私を慰める。
5 私を苦しめる者の前で
あなたは私に食卓を整えられる。
私の頭に油を注ぎ
私の杯を満たされる。
6 命あるかぎり
恵みと慈しみが私を追う。
私は主の家に住もう
日の続くかぎり。

（聖書協会共同訳）

ハロウィンが終わり、アドヴェントが始まるまでの間、社会は一旦休止するかのように思えます。この数年で大騒ぎするためのイベントとしてのハロウィンが浸透してきて、ついに仙台駅の前でも仮装した人たちがだいぶ集まるようになってきました。ハロウィンとクリスマスという二つのイベントに挟まれた、一一月という時期は、ともすると、大きなイベントの中間休止のようにも見えます。

さて、一一月というのは、キリスト教的に見ると、実は死者の月です。一一月一日はカトリックの全ての殉教者たちを覚える記念日で「万聖節」と呼ばれています。お化けがこの世にやってきていたずらをする一〇月三一日と、永遠の命である方の誕生を祝う一二月のクリスマスの間で、一一月は、今はもういなくなってしまった人たちのことに思いを馳せる静かな期間だということになるでしょうか。

のっけから死者の月の話になってしまいましたが、この詩編二三編という詩は、キリスト教の教会では、おそらく葬儀の際に読まれることが多い詩ではないかと思います。実は、私の祖母の葬儀のときにも読まれた聖書の箇所も、この詩編でした。この詩編はたった六節の短い詩編ではありますが、初めから終わりまで、穏やかで優しい、しかし確固とした意志の強さを感じさせる詩編です。

それにしても、なぜこの詩編は葬儀のときによく読まれるのでしょうか。考えてみると少し不思議な感じがします。この詩編は、文字通りに見るなら、死後の世界についてのことなどは語っていません。三節にある「生き返らせ」るという言葉も、実はどちらかというと意訳に近いもので、ヘブライ語で読むなら、「取り戻す」ですとか「立ち戻らせる」という意味がこの言葉の一番素朴な意味合いになるはずです。直接的に死後の世界のことなどに触れていないにもかかわらず、この詩編が葬儀の場面で読まれるというのは、しかし、理由のないことではないでしょう。というのは、この詩編が語るものは、何よりもいのちの

ことであろうと思われるからです。

詩編二三篇は、そういってよければ、やはりいのちの詩編だというのが最も適切に思えます。この詩編の直前に置かれた詩編二二編は、言うなれば死の詩編というべきものです。新約聖書において、十字架で死なれたイエスに語られた詩編二二編が、まさに死というものの何たるかを指し示す詩編であるとするなら、それに後続する詩編二三編は対照的にいのちというものの何たるかを指し示す詩編です。

では、この詩編のいったい何がそれほどに、いのちを指し示しているように思われるのでしょうか。この詩編には、明示的に書かれている訳ではありませんが、言及されていないものがいくつかあります。例えば、友人の多さ、富、名声、人生における成功、権力、地位、そういったものはこの詩編からは全く感じられません。私たちが幸せな人生を思い描くときに想像してしまうようなお金や成功、業績などといったものはここには全く見られないのです。にもかかわらず、この素朴で簡潔な詩編の中で歌われているものは、なんと豊かなことでしょうか。これはまさに一つの驚きです。あたかも、私たちが人生で追い求めている様々のものが、人生における豊かさとは全く関係がないと言われているようなものです。

私たちが私たちの人生を生き延びようとするとき、いわば日毎の糧を得ようとして競走するとき、私たちはいかに多くのものを背負い込んでしまうことでしょうか。競走していく中で、私たちはさまざまのものが足りないと思わされます。才能に、能力に、努力に、創意工夫に、そういったさまざまのものに抜きん出ていなければ、過酷な競走に勝つことなどできず、競走の先にパンを得ることができないのだと私たちは思い込んでしまいます。私たちに馴染みの世界では、パンを得るためには、いのちを得るためには他のさまざまのものを押し除ける競走が必須であるはずです。しかし、それではなぜ、詩編二三編はこのよ

うな生存競争から遠く離れた穏やかさがあるのでしょうか。地位、名声、財産、友の多さ、そういった、生存競走を勝ち抜くための原資になるようなあらゆるものが欠けているにもかかわらず、なぜ不思議な豊かさがこの詩編にはあるのでしょうか。

この詩編がいのちについて差し示していることは、もしかするとたった一つのことなのかもしれません。そしてそれは拍子抜けするほど単純で、何度も聞かされてきたことがあるほど馴染みのあるものです。「あなたは私と共におられ」るということ、つまり神が私と共にいるということ、それだけなのではないでしょうか。

この詩には友人の多さ、富、名声、成功、権力、地位、才能、能力、努力などが欠けています。私たちが幸せに暮らしていくために必要だと思い込んでいるほとんど全てのものが欠けています。にもかかわらず、おそらく私たちの多くが持ち合わせていない神への信頼だけは、この詩編には満ち満ちています。「私には乏しいことがない」という詩人は、しかし、ほとんどあらゆる物体的な幸福や社会的な幸福について言及しません。外見的には、おそらくほとんどの必要なものが欠けているのではないでしょうか。にもかかわらず、この詩編の詩人は、たった一つのものだけは強く持っています。神が私と共におられるということに、この詩人は疑いを持っていません。そうであるならば、この詩において、他の何をも措いても、いのちを指し示すものはまさにこの一つのこと、神が私と共におられるということ、これだけです。

私たちの旅路は、私たちが自分一人の脚だけを頼りに歩もうとするならば、あまりに過酷です。かといって、私たちが友とともに歩もうとするなら、残念ながら、途中で旅路を別にしなければならなくなるでしょう。しかし、私たちが与えられた命を歩む人生という旅路において、神だけは最後まで共におられます。

命の連鎖

大学宗教主任　藤野雄大

創世記　一章二〇～二八節

20神は言われた。
「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」
21神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。22神はそれらのものを祝福して言われた。
「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」
23夕べがあり、朝があった。第五の日である。
24神は言われた。
「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」
そのようになった。25神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。
神はこれを見て、良しとされた。26神は言われた。
「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うも

のすべてを支配させよう。」
27 神は御自分にかたどって人を創造された。
神にかたどって創造された。
男と女に創造された。
28 神は彼らを祝福して言われた。
「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

大崎市の方に出かけた時のことです。車を走らせていると、道路沿いに、豊かな稲で黄色く色づいた田園風景を見ることができました。大崎地方の田園風景は、「大崎耕土」といって、世界農業遺産というものに登録されているのだそうです。登録された理由は、大崎地域の厳しい自然環境の中で、先人たちが知恵を合わせて、多様な生き物と共生しながら、数百年にわたって独特な農業文化を育んできたとのことです。

「共生と持続可能性」、これは、昨今、注目されているいわゆるSDGsの概念に共通するものがあると言えます。「持続可能な開発目標」を示すSDGsの一環として、地球上の「誰一人取り残さない」というスローガンが掲げられています。その根底には、限りある資源を利己的に奪い合うのではなく、共有し、また次世代に引き継いでいくという、この世界を一つの共同体と見なす根本的精神があると言えるでしょう。

しかし、このような考え方は、決して、それ自体新しいもとではなく、聖書にも通じる考え方と言えます。創世記一章二〇節から二八節の箇所には、「祝福」という言葉が使われています。この祝福という言葉は、私たち現代人にとっては、なじみのない言葉かもしれません。日常生活では、ほとんど使わない言葉であり、現代では、せいぜい喜ばしいこと、ありがたいこと程度の意味しかもっていません。しかし聖書における神の祝福というのは、人間の願望とは異なっています。

例えば、宗教改革者のルターもカルヴァンは、共に神の祝福における、御言葉の力、確かさを強調します。彼等は、人間の祝福というのは、自分にはどうすることもできないことを願う、非常に不確かなものであるのに対し、神の祝福の言葉は、必ず実現する、確実なものであると、両者の違いを強調しています。つまり、神の祝福とは、ただの願望ではなく、確実で信頼するに足るものであるということです。

そして、この祝福という言葉は、聖書全体を貫く重要なキーワードになっています。もし、この言葉を読み飛ばしてしまうならば、聖書の決定的な要素を見逃してしまうことになると言っても過言ではありません。実際、翻訳の違いもあるかとは思いますが、祝福という言葉は、聖書全体で二五〇回以上使われていると言われます。そして、神の祝福は、聖書の中で、人類の歴史を導く重要な役割を果たしてきました。いわば、聖書というのは、神の祝福の歴史であり、神の祝福が、世代を超えて連綿と続いてきたことを伝えてきたとも言えるでしょう。聖書では、神の祝福という言葉を通して、生命の尊厳は基礎付けられ、不変のものとされています。

創世記一章は、聖書において、その祝福という言葉が、一番初めに用いられている箇所です。つまり、ここから神の祝福の歴史がスタートしているのです。それでは、ここでは神の祝福はどのように用いられ

ているのでしょうか。ここでは、神の祝福は、命と結びつけられています。より具体的には、それは繁殖と増加、生殖によって種が増えていくことと結びつけられています。しかし、この「産めよ、増えよ」（二二、二八節）という祝福の言葉に対して、違和感を覚える方もいらっしゃるかもしれません。

例えば、現代では、ライフスタイルというのは多様になっています。昔であれば、結婚して、子どもを産むというのは、当たり前のことであったかもしれませんが、望んでいても子供が与えられないということもあります。あるいは子どもを産むことを望まないという選択もあり得ます。また多様化する現代では、そもそも結婚しない、独身のまま過ごすというライフスタイルもあります。そういった点では、この祝福の言葉を、心から喜べないということがあるかもしれません。むしろ、場合によっては一つの生き方を強制されるような暴力的な言葉として受け取られる可能性もあります。しかし、この祝福の言葉は、確かに子どもを産み、育てていくということを想定していますが、それは単に、個々の繁殖、生殖行為だけが祝福の対象になっているのではないということを見逃してはならないと思います。この祝福は、世代を超えて、引き継がれていく命の連鎖であり、血縁的つながりだけに限定されたものではありません。

このことは新約聖書において、より明確になります。例えば、イエス・キリストご自身が、生涯独身で、血縁的な子孫を残しませんでした。また「マタイによる福音書一九章一一節」には、「天の国のために結婚しない者もいる」と語られています。さらに決定的なのは、「ガラテヤの信徒への手紙三章七節」において、「信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子であるとわきまえなさい。」と、使徒パウロは語っています。つまり、ここでは、血縁的つながりだけでなく、前の世代から、次の世代への大切なものが引き継がれていくことが、祝福され、重んじられていると言えます。その意味で、神の祝福は、個人的なも

のというよりも、むしろ共同体的、人類全体、あるいは、この世界全体を、神の被造物としての共同体と見る感覚が存在していると言えます。

創世記一章が伝えていることは、命は、神の祝福の下に置かれ、祝福の内に生み出されているということです。そして、その命の祝福は、創造の時だけでなく、その後の人類の罪の中で曝らされることがあったとしても、一貫しており、この世界の終わりの時まで連鎖していくことになります。この世界の歴史、世代の継承とは、神の祝福の連鎖によって、織りなされているのです。とは言え、この命の祝福は、決して漫然と、目的なく行われたわけではありません。聖書では、世代を超えて続く、祝福の連鎖、祝福の歴史は、一点に集約されると説きます。「エフェソの信徒への手紙」一章三節には、「神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました」と記されています。

霊的な祝福とは何でしょうか。それは、聖霊なる神のことであると解釈されています。イエス・キリストによって、聖霊という賜物が与えられることで、神の祝福は完成されるという意味です。ここには神の三位一体的働きを認めることができるでしょう。つまり、父なる神が、世界のはじめに与えられた祝福は、子なる神イエス・キリストの犠牲によって、聖霊なる神が、私たちに与えられることで完成するということです。その意味において、神の祝福の歴史とは、救いの歴史でもあります。聖書は、このように世のはじめから終わりへと至る極めて壮大な世界観、歴史観を持っています。そして、私たちの命も、生涯も、その一部に含まれています。その意味で、聖書の示す祝福の歴史とは、共同体的なものであると言えます。

これは、近代以降の個人主義的人生観の中でしばしば忘れ去られてきたものでした。確かに個人の自由や、個人の決断、それも重要なことです。しかし、それだけではこの世界は成り立ちません。共同体的感

覚が失われる時、この世界は弱肉強食の世界、利己心と利己心のぶつかり合いとなります。そして、実は、今の世界を生きる私たち現代人の苦悩は、そこにあるのではないでしょうか。自分自身の人生を、命をただ個人主義的に捉えるならば、私たちが生きる究極的意味とは、結局のところ、自己実現ということになってしまいます。高い地位を得る、社会的に名声を得る、優れた能力や特技を発揮する。どのような目的であるにしても、それだけであるならば、人間の生は、非常に個人的な次元に限定されたものになります。聖書が示しているのは、そのような個人主義的人生観ではなく、共同体的感覚によって自分の人生、命の意味を捉え直すことだと考えます。これは、個人の自由や人生のおける自己実現を否定するものというよりも、それらを共同体的なものの中に位置づける生き方です。

このような祝福の連鎖、命の連鎖に自分自身の人生を位置づける時、自分自身の命とは、個人的なものというだけでなく、宇宙的、歴史的意味を獲得することになります。聖書的に言えば、私たちの命や人生が、すべて神の祝福と御計画の内にあるということです。そうであるならば、私たちが心に留めなければいけないこととは何でしょうか。それは、自分自身の成功だけを願うのではなく、自分の生涯を通して、次の世代に何を引き継いでいくか、何を残していくかを考えることです。創世記一章にある「産めよ、増えよ」という神の祝福は、世代を通して何を残していくか、引き継いでいくかを問いかけることにもなるのです。それは、いわば「神の祝福によるSDGs」と表現することもできるでしょう。東北学院に学ぶ皆様は、地域社会に、日本に、そして世界に貢献する生き方を目指していただきたいと願います。

天にある希望

大学宗教主任　渡邊有美

ヨハネによる福音書　五章二一～三〇節

21すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える。22また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。23すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。24はっきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。25はっきり言っておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。26父は、御自身の内に命を持っておられるように、子にも自分の内に命を持つようにしてくださったからである。27また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子だからである。28驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、29善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。

30わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。

コロナ感染症が世界中に広まってからはや3年。今年は、英国のエリザベス女王だけではなく、私の周辺でも家族や友人の家族を含め、多くの人が亡くなった年となりました。このような時に考えるのは、命は神から与えられ、そして取られるものだということです。死は誰にでも訪れる、誰もが免れることができないものの一つですが、コロナ禍になり、通常よりは多くの人が死について考えた数年になったのではないかと思います。人生で何が大切なのか、行動制限がされている時だからこそ普段当たり前のように行っていたことの大切さや、人と人とのつながりに気づくひと時となったと感じます。中世から近世にかけてのヨーロッパでは、「メメント・モリ」（死を思え）という言葉により人々は死を覚え、自身の歩みを省みました。時と共にそれはハンス・ホルバイン（子）の《大使たち》（1533）に見られる「髑髏」や、フランドルの画家たちの絵画作品における、すぐに朽ち果ててしまう「果物」、「花々」、「食べ物」などにより表現され、近世になると「シャボン玉」などにより儚さが表現されました。そして時には「砂時計」として表現されるようにもなりました。

四季がある日本では、時の移り変わりに人々は敏感だと言えるでしょう。しかし、なぜ生きているのか、どうして人は永遠には生きられないのか、或いは、「永遠」に対しての憧れが多くの人に存在するのはなぜかということについて、『聖書』は以下のように語っています。

「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、**永遠を思う心**を人に与えられる。
それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない。」

（「コヘレトの言葉」三章一一節、太字執筆者）

「ヨハネの福音書」五章二四節には、「わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている」と記されています。すなわち、イエス・キリストを信じる者には、「永遠の命」が与えられることが宣言されています。

ヴァティカン市国にあるシスティーナ礼拝堂には、彫刻家のミケランジェロ・ブオナローティ（1475-1564）による《最後の審判》（1541-47）が祭壇の背後に壁画として描かれています。ミケランジェロが教皇に依頼され描いたのが「天地創造」をも含む物語群でした。その中でも最も有名なのが、この《最後の審判》でしょう。「ヘブライ人への手紙」九章二七-二八節には、

「また、人間にはただ一度死ぬことと、その後に裁きを受けることが定まっているように、キリストも、多くの人の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです。」

と記されています。それゆえ、カトリック教会の典礼と密接に結びついた「レクイエム」には、“Dies Irae”（怒りの日）の部分にて裁きの日の恐ろしさが歌われてきました。その際、このミケランジェロの壁画を思い起こす人は多いのではないでしょうか。実際、ヴァティカンと日本のキリシタン研究のためのプロジェクトの一環として主催されたコンサートでは、ジュゼッペ・ヴェルディ（1813-1901）の「レクイエム」（1873）の該当の箇所で、ヴァティカンの至宝の音楽とのコラボレーションとして、この《最後の審判》の映像が投影されました。迫力のある音楽と気迫迫った審判者のキリストは、まさに「ヨハネ

の福音書」の五章を思い起こさせるものでした。

しかし信じる者はこの日を恐れる必要がありません。地上に霊である神が肉を身に纏って生まれた後、このように語っているからです。

「そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」

（「ヨハネによる福音書」三章一四－一七節）

それゆえ、私たちはたとえ肉体が死んだとしても、涙や悲しみもない天国で永遠に神と共に生きる希望があるといえます。地上では、様々な試練が存在します。しかし、天には希望があること、神は耐えられない試練は与えられないこと（「コリントの信徒への手紙一」一〇章一三節）を覚えて歩んでいきましょう。

狭い門と決断

大学宗教主任　椎名雄一郎

マタイによる福音書　七章一三～一四節

13「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。
14しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。」

マタイによる福音書七章の「狭い門からはいりなさい」、この聖句は個人的にもっとも印象の強い聖書個所です。なぜなら、私が初めて読んだ聖書の個所だからです。いまから三〇年以上前、高校の入学式で読まれました。毎年この聖句が読まれていたわけではなく、たまたまこの聖句が選ばれたようです（その後入学式に何回かでましたが、この箇所が読まれることはなかったため）。「狭い門からはいりなさい」は半ばことわざのように聞こえますが、皆が必ずしも選ばない、困難な道を選択すると成功するなどという、教訓的な聖句ではないと考えます。なぜなら、「狭い門」は「命に通じる門」とあり、「命に通じる門」が「この世の中での成功」とは違うと思うからです。今日はこの箇所について、私のこれまでの体験も含め、イエス様が何を伝えたかったのか考えます。

人間はだれでも社会的に成功したいでしょうし、高収入を得たい、人々に尊敬されたいと考えるでしょう。そしてできれば、なるべく苦労はしたくない、苦しいことは避けたいと考えます。私もその一人です。一方、難しいものでも手に入れたいと同時に考えます。私の専門はパイプオルガンですが、パイプオルガンを専門に勉強しようと考えたのも実はこの聖句によるところが大きいのも事実です。

私の高校は幼稚園から大学院まである総合学園で、高校に入学するとほとんどの生徒は大学進学が約束されますので、受験勉強以外のことに、力を入れます。私はたまたまその高校のパイプオルガンを弾くクラブに惹かれて入部しました。そして高校二年生の時に、専門に勉強したいと考えるようになりました。もちろん親は大反対でした。実際、私が親でしたらやはり反対したと思います。

しかし結果としてこの道を選んだわけです。もしもその時にそのまま系列の大学に行っていたらどうなっていたか、もちろんわかりません。しかし私が昔の自分にアドバイスするならば、趣味でやっておい

た方がよいというでしょう。様々な出会いもあり、今日皆さんにこのようにお話ししているのも、高校二年生の時の決断があったからです。しかし様々な困難にぶち当たりました。それは「狭い門」を選んだことになるのでしょうか。私はこの決断を「狭い門」を選んだと考えていたのですが、本当にそうでしょうか。

またこのような考え方もあります。広い門は「みんなが通ることのできる道」、狭い門は「大勢では通ることのできない道」です。同調圧力によってみんなと同じ道、つまり広い道を通っていくと、その先は滅びであると考えるわけです。「○○さんがそうだから私も」の考えがよくないと言っているのでしょうか。道徳的、教訓的に考えるとそのようなことを言っている可能性も否定はできません。それぞれ個人の選択が大事であることはもちろんです。

しかし私はここで二つの点に注目したいと考えます。「門」と「命に通じる」という言葉です。注解書によると、この話はもともとルカによる福音書一三章二三節以下との関連が述べられています。Q資料を基に、このマタイによる福音書の聖句が構成されたとしています。ルカによる福音書にはこのようにあります。

ルカによる福音書一三章　二三～三〇節

すると、「主よ、救われる人は少ないのでしょうか」と言う人がいた。イエスは一同に言われた。「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたがたが外に立って戸を叩き、『ご主人様、開けてください』と言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返って来るだけである。

その時、あなたがたは、『ご一緒に食べたり飲んだりしましたし、私たちの大通りで教えを受けたのです』と言いだすだろう。しかし主人は、『お前たちがどこの者か知らない。不正を働く者ども、皆私から離れよ』と言うだろう。あなたがたは、アブラハム、イサク、ヤコブやすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分は外に投げ出されているのを見て、そこで泣きわめいて歯ぎしりする。そして人々は、東から西から、また北から南から来て、神の国で宴会の席に着く。そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある。」

注解書は、マタイによる福音書はおそらく、このルカの内容に「門」だけでなく「道」をつけ足したのではないかと考えています。ルカによる福音書とマタイによる福音書の内容を比較しながらよむと興味深い点がいくつかあります。

まず「入口」が狭いということです。マタイでは「狭い門」、ルカでは「狭い戸口」といっています。いずれも「入口」の話なのです。入口に入った後に、どのような道が用意されているかについては、何も言及されていません。つまり入口を前にして、どのように決断するか、イエスはこのことを私たちに問うておられると読み取ることができます。

またマタイでは「狭い門は、それを見出すものは少ない」とし、ルカでは「入ろうとしても入れない人が多いのだ。」（二四）と述べています。「入ろうとしても入れない人が多い」とはどのようなことでしょうか。戸口ですから、入る最低限の大きさはあると思います。しかし入ろうと思うが、様々な現実社会の問題、世間体やしがらみ、プライド等によって、入ることを躊躇してしまうということなのではないでしょうか。そして躊躇しているうちに、主人によって戸口を閉められ、その後に入ろうとしても、もはや

入ることが叶わないということなのだろうと考えられます。

さらにルカの冒頭の問い「主よ、救われる人は少ないのでしょうか」について、イエスはYesともNoとも言っていないのです。そして「人々は、東から西から、また北から南から来て、神の国で宴会の席に着く。」といっています。ということは、答えはYesで大勢の人がそこに入るということを言っているのです。マタイの箇所に当てはめると、「命に通じる門」は狭く、見出す人も少ないが、困難な道ではない。なぜなら「人々は、東から西から、また北から南から来て、」命に通じる門を通って救われると、読むことが可能なのではないでしょうか。「門を選ぶ」という決断が大事であるとイエスは言っていると考えます。

私の先輩が「社会で大事なことは決断することである」と語っていました。良くないことは、複数の選択肢があった場合、決断できないままであることで、それは間違った方向を選択するよりも、さらに良くないと教えられました。選択、決断することの大事さを教えてくれたわけですが、イエスも「決断の大切さ」をここで私たちに教えています。つまりどの門を選択するかです。門は入り口で、選択、決断する際に見えるものです。その決断の時に「命に通じる門」を選択するように求めています。

普通は「命に通じる門」を選択するでしょう、と思うかもしれません。しかし私たちの現実はそうではないと感じます。「滅びに至る門は大きく、その道も広い。そして、そこから入る者は多い。」とあるように、大きな門であれば、とりあえずは大丈夫と考えないでしょうか。みんながそこから入っているから、大丈夫、みんな一緒だから何があっても安心だ、と感じることがないでしょうか。自分の意志を表明することなく、気が付いたら広い門を通り過ぎていたということが日常生活でよくあるのではないでしょうか。

イエスは、日々の選択、決断を私たちに求めているのです。何が「命に通じる門」なのか、神が招いてくださっている「神の国の宴会の席」に、私たちは素直に「はい」と言って受け入れているのか、または今日はちょっと用事があってなど、様々なしがらみなどによって断っていることがないでしょうか。神様が招いてくださっている「宴会の席」は、狭い門かもしれませんが、苦難の道ではないはずです。日々、私たちは神様のみ言葉を聴き、示された選択肢から決断していきたいと思います。

《祈り》

お祈りします。

天の父なる神様、今日もこの礼拝の時、あなたのみ言葉を聴くときを与えられていることを感謝いたします。

私たちは、とかく広い門を選択して歩んでしまいます。しかし神様、あなたは私たちに通れない門は用意していません。

必ず私たちが通ることのできる門を用意してくださっています。

どうか私たちがその門を見出し「命に通じる門」を通っていくことができるように導いてください。

この感謝と願い、主イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン。

喜び・祈り・感謝

大学宗教主任　大門耕平

テサロニケの信徒への手紙一　五章一六～一八節

16 いつも喜(よろこ)んでいなさい。17 絶えず祈(いの)りなさい。
18 どんなことにも感謝(かんしゃ)しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神(かみ)があなたがたに望(のぞ)んでおられることです。

昔、ユダヤ教のある教師―ラビ（ハシド派の年老いたラビ）は弟子たちにこういう問いかけをしました。
「夜が終わり、朝が始まる時間―聖なる祈りの時間―は、どうしたらわかるのか。」
一人の弟子はこのように答えます。
「それは、遠くから動物を見て、それが羊なのか、犬なのかを見分けられる時ではありませんか？」
ラビは、「違う」と答えます。
別の弟子がこう答えます。
「それは、木を見て、それがイチジクの木なのか、梨の木なのかを見分けられる時ではありませんか？」
「違う」とラビは首を振りました。
いくつかの意見が出されましたが、ラビを満足させるものはありませんでした。
今度は、弟子の方から訊ねます。
「私たちにはわかりません。答えを教えてください。」
「朝の始まりというのは、どの男、どの女の顔を見ても、それが自分の兄弟であるということがわかるときのことだ。それまでは、まだ夜ということだ。」
この問いは、私たちに、人との関係について改めて考えさせてくれるものであります。努力して互いを兄弟のように思うや、だれをも大切な、かけがえのないものと理解できるようにならなければなりません、ではなく、だれもが兄弟であることがわかる、すなわち、本来、人間はだれもが兄弟のような存在であるという前提を思い起こすということを教えてくれるものであります。
本日の聖句は、キリスト教伝道者であったパウロが執筆した手紙であります。パウロの執筆した手紙に

は、特に、「感謝」という言葉が多く用いられます。このテサロニケ第一の手紙だけでも、多くの「感謝する」との表現がでてきます。

さて、そもそもパウロが語る「感謝」とはどのような思いが込められているのでしょうか。それは、神の恵みという言葉と密接な関係があるものとなっています。聖書において、「感謝」とは、神の私たちへの慈しみ、私たちへの愛、その神の思いや行為に対する人間の基本的な態度であり、また、応答の心の表現として「感謝」という言葉が使われています。すなわち、今、見えている世界に対する反応としての感謝ではなく、生かされていること、神との関係を信頼することの表現として、神への応答的な態度が感謝であるということです。

旧約聖書において、感謝は、神からの救いに対する応答的な態度とされます。神の約束や救いの出来事に対する応答的な態度として、感謝するという構造になっています。新約聖書では、イエスの愛の業や許しの行為、十字架の出来事によってもたらされたことへの応答として感謝が使われます。すなわち、パウロが述べる「感謝」、その思いの根底には、神からの恵み、イエスからの愛が先行することの確信があるのです。ここにパウロの感謝することの奥深さがあります。それゆえに、パウロは、どんな境遇においても「感謝しなさい」と語っていくのです。

このように考えると、パウロの語る「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」は、励ましの言葉となります。目の前のものへの反応として、この言葉を理解するとき、それは、私たちが、いつも、たえず、どんなことにも、喜び、祈り、感謝することができないことを指摘する厳しい言葉のようになります。しかし、神からの恵みが先行すること、イエスによる無償の愛が前提と

なっていることを知るとき、この言葉は、励ましの言葉になるのです。すなわち、私たちが許され、愛され、守られていることの約束があること、それを信頼することができることを伝える言葉となるということです。

すべての人を兄弟と理解しなければならない、と戒められるとき、私たちは戸惑いを覚えます。気が合わない人もいる、関係性を築くことができない人がいる、という思いが浮かび上がります。しかし、ユダヤ教のラビは、そのような私たちに、本来、人間はだれもが兄弟のような存在であるという前提を思い起こすということを教えてくれるものでありました。本日のパウロの言葉も、同じであります。パウロの教える言葉、喜び、祈り、感謝することは、神からの恵み、イエスの無償の愛への応答としての態度であります。そして、それは、私たちが、神からの恵み、イエスの無償の愛を信頼することができることを伝え、励ます言葉であります。

現実の私たちの生活の中では、感謝の思いよりも、むしろ不平や不満の言葉を語る方が多いかも知れません。満たされない心を常に抱いて生活を営んでいます。一人でいるとき、その苦しさは私たちを孤立させていくこととなります。

そのようなとき、いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい、どんなことにも感謝しなさいという言葉は、私たちを突き放す言葉のように聞こえてしまうことがあります。しかし、この言葉は、苦しい中においても、神の恵みがそれよりも先行することの確信を伝えるものであります。パウロは、テサロニケの教会の人々に、神の愛、イエスの愛が、先行し、決して失われることのないものとして、与えられていること、それを信頼できることを、このことを本日の聖書の言葉で伝えているのです。

世界の現状やコロナ禍の中、そして、それぞれが抱える不安や悩みの前で現在と将来に向けての不安が増幅しています。しかし、その中で、それよりも先行するものを信じられることがあること、それは、私たちを強く励ますこととなります。本日のパウロの言葉に励まされ、他者とともに歩む日常をともに過ごしていきたいと思います。いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝できることを覚えていきましょう。

わたしは命のパンである。

（ヨハネによる福音書　6：48）

「永遠のいのち」と「この世のいのち」

理事長特別補佐〈宗教センター担当〉　鐸木道剛

マタイによる福音書　八章二二節

22イエスは言われた。「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」

ルカによる福音書　九章五九～六〇節

59そして別の人に、「わたしに従いなさい」と言われたが、その人は、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。60イエスは言われた。「死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。あなたは行って、神の国を言い広めなさい。」

聖書で記されている「いのち」には、ふたつの意味があります。「永遠の命」と「この世の命」（人間としての、つまり動物的な限りある命）のふたつです。ギリシア語では前者は「ゾーエー（ζωή）」、後者は「プシケー（ψυχή）」です。それを日本語訳の聖書では、両方とも「命」と訳しています。

「永遠の命」を意味する「命」は、例えば次の箇所です。

「私は道であり、真理であり、命（ゾーエー）です」（ヨハネ一四：六）。

「命（ゾーエー）に通じる門は狭く、その道も細い」（マタイ七：一四）。

「私は復活であり、命（ゾーエー）である。私を信じる者は、死んでも生きる」（ヨハネ一一：二五）。

「この世の命」を意味する「命」は、例えば次の箇所です。

「自分の命（プシケー）のことで何を食べようか何を飲もうかと、また体のことで何を着ようかと思い煩うな」（マタイ六：二五）。

「自分の命（プシケー）を得るものは、それを失い、私のために命を失う者は、それを得るのである」（マタイ一〇：三九）。

イエスが金持ちに対して言った「愚かな者よ、今夜、お前の命（プシケー）は取り上げられる」（ルカ一二：二〇）。ただし、新しい聖書協会共同訳では、ここは「魂（たましい）」と訳されています。

改革派の信仰箇条である『ハイデルベルグ信仰問答』を見ると、冒頭に「主は、その聖霊によってもまた、わたしに、永遠の生命を保証し、わたしが、心から喜んで、この後は、主のために生きることのできるようにして下さるのであります」（竹森満佐一訳、五頁）とあり、また『アウグスブルグ信仰告白』が依拠する「ニケア・コンスタンチノープル信条」、つまりミサで使われる「クレド」では「死にし人のよみがえりと来世の命（ゾーエー）を望む」（『日本聖公会祈祷書』一九五九年改定訳）とあり、いずれも「永遠の命」あるいは「来世の命」です。

以上の箇所を見ても明らかなように、「永遠の命」と「この世の命」、そのどちらが大事か、それは「永遠の命」に決まっています。

イエス様はまた死者の弔いを軽視します。「死者のことは死者に任せよ」（マタイ八：二二、ルカ九：五九－六〇）とおっしゃいます。これは死者を弔う自然な感受性を逆撫でする言葉です。聖書はそもそも動物としての人間の価値を否定して神の秩序を教えるから、そういうことになるのです。神はアブラハムに、生まれ故郷を離れてカナンの地に移動せよと言って（創世記一二：一）以来、多くの日本人が通常、生きる「よりどころ」としている地縁と血縁を否定しています。

しかし世間一般、通常の世界ではどうでしょうか？「人のいのちは地球より重い」と言われます。そして教会でも葬送儀礼は重要です。キリスト教も死者を弔って、初めて土着するともよく言われます。キリスト教も葬式仏教と同じになれば土着すると言うことです。つまり日常の感受性では、最も重要なものは動物的いのちということになります。今や命が全てに優先します。それが人間中心主義（ヒューマニズム）

です。

そして確かに、コロナ感染症のとき、キリスト教の教会の多くは、その人間的価値にしたがって行動しました。多くの教会は、礼拝をやめたのです。やめなかった教会もあります。しかし多くはやめました。なぜなら礼拝によってコロナに感染する可能性があったから。つまり「人の命は地球より重い」からです。

しかし礼拝なんてそんなものだったのでしょうか?命を捨てるに値するのは神様だけではなかったのでしょうか?

聖書に記されている神中心主義から、この人間中心主義（ヒューマニズム）への転換は、どういうことでしょうか?この転換は、キリスト教ではどう位置付けられているのでしょうか。

人間中心主義（ヒューマニズム）の根拠は、神が人間になったからです。つまり受肉です。神が虚しい人間となってくださったから、人間は神と繋がりができ、現実が肯定されたのです。物質の「聖化」あるいは「神化」と言います。しかし物質は相変わらず朽ちていきます。物質が神になったわけではありません。このことは八世紀に既にきちんと構造化されています。神に対してはラトレイア（絶対的）の礼拝。物質世界のこの世に対してはプロスキネシス（相対的）の礼拝との区別です。

そしてその人間中心主義は、十二世紀のゴシックを経て、ルネサンスにおいて展開されました。近代です。ルネサンスの哲学者ピコ・デッラ・ミランドラ（Giovanni Pico della Mirandola 1463-94）が記した『人間の尊厳について』（一四八六年）がもっとも重要でしょう。その中で彼は、ヘブライ語から新しくラテン語に訳された聖書を読んで、重要なこととして、まず「三位一体の神秘」、「御言葉の受肉」、そして「救世主の神性」を挙げています。人間の尊厳の根拠として、イエス様の神性と人性を挙げている

のです。つまり人間の尊厳は、やはり受肉によって根拠付けられているのです。

しかしそもそも「永遠の命」と「この世の命」、これは二項対立なのでしょうか？

先日九月十九日、エリザベス女王のお葬式がありました。お葬式が始まってすぐに歌われた賛美歌（イギリスの国教会で聖公会ですから、日本では「聖歌」と訳されています）が、『古今聖歌集』一九五番の「この日もくれけり」、英語歌詞は「あなたが与えてくださった日々は終わった（The day thou gavest, Lord, is ended）」でした。その最初の一節を聞いた時、ぼくは死んでもいいと思ったのです。そして二十年以上前のダイアナ妃のお葬式を思い出しました。一九九七年九月六日のダイアナ妃のお葬式で、やはり同じウェストミンスターの主任のウェスレー・カー（Dr Wesley Carr）司祭は、その勧告（Bidding）の中で、プリンセス・オブ・ウェールズのダイアナ妃の生涯に感謝を捧げるために私たちはウェストミンスター修道院に集っていると言った後、次のように言われました。「神のために、われわれ自身の死と弱さを捧げよう（and let us offer to him and for his service our own mortality and vulnerability）」。この時も、ぼくはこれなら死んでもいい、死ぬことができると思ったのです。

ここに見られるのは、虚しい「この世の命」は神様によって与えられているという信仰です。ここに「この世の命」と「永遠の命」の対比はありません。限りある「この世のいのち」は「永遠のいのち」に抱かれ、その両方が肯定されているのです。

パウロも『ローマの信徒への手紙』の中で次のように記しています。「わたしたちは、生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです」（一四：八）。また『フィリピの信徒への手紙』でも「生きるにも死ぬにも、わたし

の身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い希望しています」（一：二〇）と記しています。

十三世紀の聖フランチェスコもまた、有名な「兄弟太陽の讃歌」の中で、「我々の兄弟である太陽ゆえに、主よ、汝は賛美されよ」と歌った最後に、「我々の姉妹である死ゆえに、主よ、汝は賛美されよ」と歌っています。

近代の詩人哲学者キルケゴール（Søren Kierkegaard 1813-55）も引用しておきましょう。

「キリスト教の用語では、死も最大の精神的悲惨を表すことばであるが、しかも救済は、まさに死ぬことに、死んだもののように生きることにあるのである」（『死にいたる病』桝田啓三郎訳『キルケゴール全集　二十四』筑摩書房、一九六三年、一一頁）。「それだから、キリスト教的な意味では、死でさえも〈死にいたる病〉ではない、ましてや、苦悩、病気、悲惨、艱難、災厄、苦痛、煩悶、憂い、悲嘆など、およそ地上的、時間的な悩みと呼ばれる一切のものも、そうではない。・・・キリスト教はキリスト者に、死をも含めて、一切の地上的なもの、この世的なものについて、このように超然と考えることを教えてきた」（同、一九-二〇頁）。

考えてみれば、既に引用した『ハイデルベルグ信仰問答』を見ると、「永遠の生命」が保証された上で、「この後は、主のために生きる」と書いてありました。これがわが東北学院の建学の精神です。一三六年間の卒業生の働きに現れているところです。

命に通じる門

日本基督教団　仙台広瀬河畔教会　牧師　望月　修

マタイによる福音書　七章一三～一四節

13「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。14しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。」

主イエス・キリストが弟子たちや集まって来た群衆に向かってなさった「山上の説教」の終わりの部分に、冒頭に掲げた言葉が語られています。それまでお語りになったことを、おまとめになり、注意を促しておられるのです。

「狭い門から入りなさい」。たいへんよく知られている言葉であります。しかし、その意味は、普通に考えられているように、「楽をしていたら、どんな道でも究めることなどできない」とか、「信仰の道は辛く厳しく、苦行が伴うものだ」というようなことではありません。ここでの「狭い」とか、「細い」は、主イエス・キリストを救い主とする「信仰」を意味しています。

見落とせないのは、「命」に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか、と語られていることです。主イエス・キリストを救い主と信じて仰いで生きて行くところに「命」があるのです。

その命に「入る」ことがなかったら、滅びることを覚悟しなければなりません。その意味で、信仰を持つとか、こうして神を礼拝することは、命を得るか、滅びるかの選択をすることの一つになるでありましょう。その選択は、常識から言えば、狭く、そして細いのです。

人間の生活は、一度の選択で定まってしまうものでないかもしれません。選択の幅は広く、選択肢は多くあるように思われます。しかし、最後は、こちらか、あちらかの二者択一になるでありましょう。

旧約聖書の「申命記」に次のような一節があります。「見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く」（三〇・一五）。

神からご覧になれば、誰の生活にも、命の道か、死の道があるだけです。

どういうことでしょう。もし、私たちが神を信じていないのであれば、物事を選択をする際に、私たちが考えることは、どちらを取ったら成功するか、得をするか、ということでありましょう。私たちは、そういうことで思い悩みます。しかし、損得だけを考えたら、どちらを取ってもたいして変わらない、という場合が少なくありません。また、世間的な成功が必ずしも幸福とは言えません。しかも、いずれを選び取っても、私たちの生活は、死で終わります。

それに対して、私たちの生きることと死ぬことを支配しておられる神であります。ですから、神がどのようにご覧になるかによって、選び取ることが大切であることに気づかされます。

聖書が証しする神は、こういう言い方でもって、私たちに何としても「命」を与えようとしてくださっているのであります。主イエス・キリストは、その「命」を求めて歩むことを、ここでお求めになっているのです。

神の与えてくださる「命」に入る生活は、狭い門を通り、細い道を歩む生活であります。入り口にある門の見事さや、大勢の人が行くからということで、誤った選択をしないようにしなければなりません。

聖書には、「門」や「道」になぞらえて、キリストについて語っている箇所があります。

「わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。・・・わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」（ヨハネ一〇・九～一〇）。

「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことがで

きない」（ヨハネ一四・六）と。

聖書は、常識的なことや単なる道徳を説く書物でないことは、こうして礼拝に出席しておられる皆さんには、お判りになると思います。大切なことは、聖書に証されている主イエス・キリストを救い主と信じて、命の道を選び取り、その命を生きることです。それがなければ、聖書を読んでも、あまり意味がないというだけでなく、実は「命」を見失ってしまうのです。

命に至る門、そして、その道を、救い主イエス・キリストに見出すことができれば、と思います。

《祈り》

父なる神。

あなたが、私たちのもとにお遣わしくださった御子である私たちの救い主イエス・キリストに、真の命を見出すことができます。どうぞ、誰もが、この真の命を生きることができますように、導いてください。

この祈りを主イエス・キリストの御名によって御前に捧げます。アーメン。

向こう岸へ渡ろう

日本基督教団　仙台東一番丁教会　牧師　瀬谷　寛

マルコによる福音書　四章三五～四一節

35さて、その日の夕方になると、イエスは弟子たちに、「向こう岸へ渡ろう」と言われた。36そこで、彼らは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。37すると、激しい突風が起こり、波が舟の中まで入り込み、舟は水浸しになった。38しかし、イエス自身は、艫の方で枕をして眠っておられた。そこで、弟子たちはイエスを起こして、「先生、私たちが溺れ死んでも、かまわないのですか」と言った。39イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。40イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信仰がないのか。」41弟子たちは非常に恐れて、「一体この方はどなたなのだろう。風も湖さえも従うではないか」と互いに言った。

（聖書協会共同訳）

わたしたちの毎日は、つまらない、同じことの繰り返しの毎日の中に、どっぷり浸かっているように思うかもしれません。けれども、新鮮なときが訪れる事があります。

コロナの影響を受けながらも、二〇二二年度の授業が始まりました。四月には、新しい始まりを不安と期待で過ごしたでしょう。今は前期の授業を終え、また、後期の授業が新しく始まりました。それも約一ヶ月が過ぎようとしています。一ヶ月前は、新鮮な気持ちで、新しい気持ちで、この学期を過ごそう、と思っていた人も多かったことでしょう。けれどもそれにも今は慣れてしまっているかもしれません。

新しいはじまり、新しい場所に向かうときの姿を思い起こす時、響いてくる声があります。**「向こう岸へ渡ろう」**という声です。今日、先ほど読んだマルコによる福音書四章三五～四一節の主イエスの言葉です。主イエスはおっしゃいました。**「向こう岸へ渡ろう」**。主イエスは、新しい、冒険の旅へ誘われるお方です。**「向こう岸へ渡ろう」**「旅を続けよう」「新しい場所へ行こう」「わたしと一緒に行こう」。

最初にその声を聞いた主イエスの弟子たちの間にも、新鮮なときが訪れたに違いありません。そもそも、主イエスとともに過ごす毎日は、新鮮な時の連続でした。見たことも、聞いたこともないような新しい教えと業に触れることができるからです。主イエスにとっても、これから先に行く場所は、異邦人の町、初めて足を踏み入れる場所だったようです。

そこで主イエスがおっしゃいました。**「向こう岸へ渡ろう」**。いよいよ、新しい旅が始まろうとしています。弟子たちは、主イエスを舟に乗せて、湖の上を、向こう岸へと漕ぎ出して行きます。

主イエスに同行した弟子たちの何人かは、もとは漁師でした。彼らは舟のことについては専門家です。これまでは、主イエスの話を聞くばかりだった弟子が、ここで舟を漕ぐのは俺たちの出番だ、という思い

で、張り切って舟を漕いで行きます。

その途中、きっと主イエスは、あちこちで神のこと、神の国のことを宣べ伝え続けて、お疲れになったのでしょう。弟子たちの漕ぐ舟の中でお眠りになられました。

ところがそこに、風が吹き始めます。その風はだんだん激しい突風になります。船は波をかぶり、水浸しになります。自分たちは専門家として、その知識と力の限界に来たのを感じました。大きな恐れにとりつかれています。

このままでは沈んでしまう、けれども主イエスの方を見てみると、主イエスは一向に目を覚ます気配はありません。そこで弟子たちは思わず叫びました。**「先生、わたしたちが溺れ死んでもかまわないのですか」**。主イエスはようやく起き上がり、そこで**「黙れ。沈まれ」**と波を叱ります。その叱る声に、風は凪になり、湖も静かになりました。

この情景を何度でも思い浮かべる時、ここに語られていることが、わたしたちの物語であることがよく分かります。**「向こう岸に渡ろう」**。特に、毎朝礼拝が行われる東北学院大学で学ぶ皆さん、教える皆さんは、小さな小舟に主イエスをお乗せして、一緒に旅に出たようなものです。

ところがわたしたちの生活は、いつでも順風満帆というわけにいきません。学校で、クラブ・サークルで、家族がいれば家族の中で、小さな嵐がやって来ます。他人から見たら小さな嵐かもしれませんが、自分にとっては、激しい嵐のように思えるのです。そこでわたしたちは、自分で何とか、問題を切り抜けようとします。けれどもうまくいきません。ふと傍らを見ます。主イエスが**「向こう岸へ渡ろう」**とおっしゃったはずなのに、その主イエスが寝ているのです。わたしたちは苛立ちます。**「先生、わたしたちが**

溺れ死んでもかまわないのですか」。あなたをお乗せして、新しい人生にでていったはずなのに、あなたは何の力にもならず、眠っておられるのですか。

けれども今度は主イエスが立ち上がり、叱りつけます。「**黙れ。静まれ**」。風を叱った言葉、と書いてあります。けれども弟子たちにとっては、自分たちが叱られたと思ったに違いありません。「**なぜ怖がるのか。まだ信じないのか**」。主イエスは神の御子です。わたしたちを、絶対に、命の危険へと投げ出すようなことはなさいません。なさるはずがありません。わたしたちを、絶対的な危機に放り出さない、その代わりに、主イエスご自身が、十字架で命を捨ててくださいました。死んでくださいました。命の危険に立ち向かってくださいました。主イエスはわたしたちに対して、そのわたしを信じなさい、そのわたしがそばにいることを信じなさい、と信頼の心を問うておられるのです。

けれども、改めて思います。どうして、主イエスは、この危機と思えるような時に、寝ておられたのでしょうか。

主イエスは、安心して、小さな専門家であるわたしたちに、ご自分の身を委ねておられるのではないでしょうか。わたしたちは時々、主イエスのお姿が見えなくなります。その時、主イエスがおっしゃった言葉を思い出しましょう。「なぜ怖がるのか。わたしが一緒にいるではないか。あなたの傍らで眠っているではないか」。だから、わたしたちは今日も、主イエスと共に、新しい場所、向こう岸へ、安心して、力と勇気をいただいて、漕ぎ出すことができます。

バベルの塔

日本基督教団　仙台東六番丁教会　牧師　中本　純

創世記　一一章一～九節

1世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。2東の方から移動してきた人々は、シンアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。3彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくいの代わりにアスファルトを用いた。4彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。5主は降って来て、人の子らが建てた、塔のあるこの町を見て、6言われた。「彼らは一つの民で、皆一つの言葉を話しているから、このようなことをし始めたのだ。これでは、彼らが何を企てても、妨げることはできない。7我々は降って行って、直ちに彼らの言葉を混乱させ、互いの言葉が聞き分けられぬようにしてしまおう。」8主は彼らをそこから全地に散らされたので、彼らはこの町の建設をやめた。9こういうわけで、この町の名はバベルと呼ばれた。主がそこで全地の言葉を混乱（バラル）させ、また、主がそこから彼らを全地に散らされたからである。

旧約聖書『創世記』一一章には、「バベルの塔」と呼ばれる出来事が記されています。ノアの洪水の出来事から間もなく、人々はティグリス・ユーフラテス川流域のシンアルという広い平野に町を築き、生活をしていました。驚くべきことに、この「バベルの塔」の物語は紀元前三〇〇〇年頃、つまり今から約五〇〇〇年前の物語であると言われていますが、その時代から三節に書かれてあるような、レンガやアスファルトを用いた建築工法が確立されていたのです。そのことは実際に、この時代に造られた「ジグラット」と呼ばれる巨大な遺跡にレンガやアスファルトが使われているのが確認されていることからも証明されています。

一節を見ると、「世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた」という書き出しから始まります。世界中の人々が同じ言語で会話をする。イメージするだけでも、とても素晴らしいことだと思います。もし、世界中の人々が同じ言葉を使って同じように話すことが出来たなら、地球上で起こっている国同士の戦争や民族間の争いはずっと減るのではないかと感じてしまいます。そして三節から四節を見ると、先程紹介したレンガやアスファルトといった最新の技術を用いて、人々は天まで届くとても高い塔の町を建造しようとしたことが分かります。これも凄いことだと思います。世界中の人々が同じ言語で会話出来るからこそ可能とされる、人類の知恵と努力の象徴とも言える最高の建造物が建てられることとなったのです。

しかし五節以降を見ると、そこへ突然神様がくだって来て人々の言葉を混乱させ、その結果、バベルの塔の建設は中止となったことが書かれています。どうして神様はそのようなことをするのだろう?と思ってしまいます。この「バベルの塔」の物語は、人間が優れた技術を持つことや、大勢の人々が集まって努力することが「罪」だと言っているのでしょうか?いえ、そうではありません。この聖書の箇所をよく読

み返して頂きたいと思います。四節に世界中の人々はどうして「バベルの塔」を建てようと思ったのか、その理由が書かれています。人々はこのように言っています。「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう。」

「有名になる」、そして「全地に散らされることのないようにする」この二つが「バベルの塔」を建てる理由でした。これら二つの理由は一見、何も問題が無いように思えます。しかしよくよく考えてみると、二番目の理由「全地に散らされることのないようにする」というのは、人々が世界中に散らばって暮らすことをやめ、一箇所に留まることを指しています。その目的が一番目の理由「有名になる」ことでした。世界中の人々が「バベルの塔」に集まっているのに、一体誰に対して有名になると言うのでしょうか？それは、人間をお造りになった神様に対してです。「バベルの塔」を造っていた人々は、『創世記』一章二八節で、神様から任されていた世界中の生き物の管理を放棄して、一箇所に集まり天まで届く塔を建てることによって、天の国を支配し、自分たちが神に成り代わろうとしたのです。そうしたはっきりとした人間の悪意が人々の間で一致していたのです。しかし、その様子を見て神様は人間を滅ぼそうとしたのではなく、言葉を別々にして世界中のあらゆる場所に住まわせたのです。

そのような「バベルの塔」の物語ですが、この話には続きがあります。新約聖書『使徒言行録』二章に書かれている、人々に聖霊がくだるペンテコステの出来事です。そこを見ると、エルサレムに色々な国の人たちが集まっていましたが、イエス・キリストの霊である聖霊が天から注がれた途端、人々は色々な言語で話し始めてコミュニケーションを取り始めたというのです。「バベルの塔」の出来事は、神に成り代わって世界を自分たちの思いのままに操ろうとした人間に対する神の戒めでしたが、「ペンテコステ」の

出来事において、神様は聖霊の注ぎを通じて人間から奪ったものを返したのです。それは何であったかと言うと、本当の意味での人間に与えられた命の言葉、つまり、主にあってお互いにコミュニケーションを図る心です。世界中の人々が心を合わせれば、とても大きなことを成し遂げることが出来ます。ただ、それが良い方向に使われるのであれば良いですが、悪い方向に使われてしまったならば恐ろしいことになります。だからこそ、神様は私たちが心を合わせる際の道しるべとして、聖霊の注ぎを通して皆の心が一致するよう導いてくださったのです。

この「バベルの塔」の物語から考えさせられるのは、これまでずっと私たちを取り巻いていたコロナ禍の状況です。コロナ禍によって、それまで当たり前のように持っていた人々とのコミュニケーションが大きく制限されてしまい、人によっては孤独感を感じてしまったり、あるいは、他者に対して誤解や不信感といったものを大きく募らせてしまった人もいます。この国に暮らしている私たちの多くは日本語という共通言語を用いています。けれども、お互いにコミュニケーションを図る心が失われがちなコロナ禍の中で、ある意味、皆の心がバラバラに散らされてしまったかのような、「バベルの塔」のような出来事が起こっているのではないかと感じます。そのように、人々の心がバラバラになってしまいそうになるこうした時だからこそ、聖書が何と言っているか思い出して頂きたいと思うのです。互いに相手のことを思いやる心、相手のことを分かろうとする心をもたらしてくださる聖霊なる神を求めて祈るように私たちは導かれているのです。聖霊なる神様を通じて、私たちは人間が本来与えられている主にあるまことの交わりと平和の中に生きるようにされているのです。そして、そのことを私たち以上に神様がいま求めておられる、ということを知って頂きたいと思います。

永遠の命を得て生きる

日本基督教団　仙台長町教会　牧師　林　完赫

イザヤ書　四〇章六b～八節

6「すべての肉なる者は草
その栄えはみな野の花のようだ。
7草は枯れ、花はしぼむ。
主の風がその上に吹いたからだ。
まさしくこの民は草だ。
8草は枯れ、花はしぼむ。
しかし、私たちの神の言葉はとこしえに立つ。」
（聖書協会共同訳）

イエス・キリストこそ真の救い主であることをここにいらっしゃる皆さんが認めなくても、人生は枯れる草のように、しぼむ花のようにこの世から必ず消えて行くことは誰もが認める真理であると思います。いくら華やかな人生を生きているとしても、最後には必ず土に帰ることになるのが我々人間です。肉の欲のためにだけ時を費やし、命を用いる人はそのような人生となり、永遠の神のみ言葉と自分の命を取り換えた人は、その肉体が消滅されても永遠の命として生き続けるのです。

普段、真理の言葉には耳を傾けず、ただ欲望だけを追い求めていた一人の弟子が、ある日師匠に聞きました。

「先生、死んだ後に永遠に生きられる命って本当にあるのでしょうか?」

すると、師匠はその弟子に「今、お前には本当の命があるのか?」と聞きました。その弟子は、自分は今、生きていると考えた反面、師匠は、その弟子が死んでいると言うのです。

つまり、その弟子は、人は死んだ後、永遠の命に与ることが出来ると考えました。一方、師匠は今、生きている人だけが死んでも永遠の命に与り、生きることが出来ると言ったのです。永遠の命は死んでから与えられるものではなく、生きている今、自分の中に永遠の命を所有した者が死んだ後にも、その永遠の命で生き続けられるのです。

幼虫が蝶になって飛び立つためには、必ずサナギの過程を経なければなりません。何にも食べず袋の中でじっとして時を待つのです。早いものは約八日間の時間を要しますが、北海道の大雪山にいるウスバキチョウは何と一〇か月間もサナギの状態でいるそうです。例えば、サナギが入っている一〇個の袋があるとします。外見上は全部同じサナギの状態のように見えます。しかし飛び立つ時が訪れた時にどの袋が破

られてその中から飛び立つのか？言うまでもなくその中で生きていたサナギが成虫になって飛び立ちます。死んだ者からは飛び立つことも、新しい命への変化も起こらないのです。人間が永遠に生きるのも同じであるのです。

肉体という袋の中で永遠の命をもっている人だけがその肉体の袋から永遠の世界へと飛び立っていくことが出来るのです。その意味でも今、自分は生きていると思い、肉の欲望のためにだけ人生を費やすのは生きているとは言えないのです。それは自分の命を浪費することです。しかし、永遠の命のために自分の人生を用いる人の死は死ではなく、生の連続であり、永遠の世界へと飛び立つ扉となるのです。それで主イエスは「**私は復活であり命である。私を信じる者は、死んでも生きる。生きていて私を信じる者は誰も決して死ぬことはない。**」と言われました。

創世記四章二六節には次のような言葉が書き記されています。**セトにも男の子が生まれた。彼はその子をエノシュと名付けた。その頃、人々は主の名を呼び始めた。**最初の人アダムが神様の言葉に逆らった結果、人間に死が訪れました。神様はそれを前もって警告し、そのことを忘れないようにエデンの園の中央に善悪を知る知識の木を植えました。しかし、人々はその警告の言葉に耳を傾けず、死を深刻に受けとめませんでした。その後、セトの時代になり、生まれた子の名前をエノシュと名付けました。エノシュとは、**死ぬべき存在、死ぬしかない存在**であるとの意味です。これは人の名前でありますが、ヘブライ語の普通名詞にも使われている言葉です。

つまり、人々はセトの時代になって、はじめて、死を真面目に受け止め、死ぬべき者である自分たちの存在に気づいたのです。その時、**人々は主の名を呼び始めた**、と聖書は伝えています。ここでの呼んだと

のヘブライ語の「**カラ**」という言葉は誰かの名前を一度呼んでみたとの意味ではありません。これは、「**招く**」との意味です。自分たちが死ぬべき存在であることを痛感したときに、はじめて命の源であり、創造主である神様を、自分たちの人生の主として招き、その神様の言葉に従って生きるようになったのです。なぜなら、自分たちがエノシュであることを自覚した以上、命の主である神様しか、その死の問題を解決するのが出来ないことを悟ったからです。

それが分かった人だけが生きることを、真の命のことを、永遠の命のことを真剣に考えるようになるのです。さらに、それを求めるようになり、それを与えることが出来る神様を探し求めるのです。そして、その探し求める人に神様は出会ってくださるのです。エレミヤ書二九章で神様は「**わたしを捜し求めるならば見いだし、心を尽くしてわたしを尋ね求めるならば、わたしは見いだされる**」と言われました。

またイエス・キリストもマタイによる福音書七章で「**求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。叩きなさい。そうすれば、開かれる。誰でも、求める者は受け、探す者は見つけ、叩く者には開かれる。**」と言われました。私たちは確かに生きるために生まれた存在です。そうであるならば生きるための道を探さなければなりません。その道がイエス・キリストであると聖書は教えているのです。イエス・キリストに出会うことが生きるための道であり、そして、死んでも生きられるカギとなるのです。

《祈り》

命の源である主なる神様、あなたがわたしたちに与えようとするのは永遠の命であることを聖書は

教えてくれました。
そして永遠の命は御子イエス・キリストを通して与えられることも教えてくれました。
どうか私たちにイエス・キリストによって永遠の命が与えられますように助け、導いてください。

神は、独り子を世にお遣わしになりました。
その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。
ここに、神の愛がわたしたちのうちに示されました。

（ヨハネの手紙一　４：９）

第五八回水曜公開礼拝説教

神はその独り子をお与えになったほどに

前理事長・院長・学長　松本宣郎

ヨハネによる福音書　三章一六節

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

クリスマスが近づいてきますと、キリスト教国でない日本でもクリスマスの華やかな飾りつけがあふれ、クリスマスの歌が流れてきます。世界中でイエス・キリストの誕生を今なおお祝いするのはなぜでしょうか？

それは、お生まれになったイエスこそすべての人の救い主だからです。

聖書が繰り返し伝えていることは、イエスこそキリスト、私たちを救ってくださる救い主だということです。昨日も今日も変わることなく私たちを救ってくださる救い主だから、クリスマスは喜びと讃美で祝う日として、二千年以上世界中で守られてきたのです。

「ヨハネによる福音書」は、救い主イエスの誕生を、神が私たちを救うために、大切なかけがえのない独り子をこの世に遣わされた出来事として伝えています。

神の、なんとかしてこの世を救いたいと思われる切実さが、大切な独り子をお与えになったという言葉から伝わってきます。

しかし、神が救いたいと思われたこの世は、神に背を向け、神から離れた生き方をしているこの世でした。

さて、昨年若い人たちの間で「親ガチャ」という言葉が流行しました。ガチャというのは、通称ガチャガチャと呼ばれているカプセルトイから来た言葉で、ものごとにあたりはずれがあることを表すようです。そしてこの「親ガチャ」は、自分の親にも当たり外れがあるということを表しています。

「誰も自分の人生の出発点を選ぶことができない。」と言われます。私たちの人生の出発点は親です。だれも選ぶことはできません。この世に誕生した時、すでに親は決まっています。その、人生の出発点で決

まっている親に当たりとはずれがあるというのです。

自分の願い通り、思い通りにいかない人生、それは「親ガチャ」がはずれだったからだ、もっと家庭環境に恵まれ、親からうけついだ才能や容姿が優れていれば、自分の人生はもっと明るいものになっていたはずだ、というわけです。

「親ガチャ」に共感を覚える若者は、いつも自分とほかの人を比較しながら、「ガチャ」の当たりで喜び、はずれで悩みながら生きていくことになるのでしょうか。

確かに、私たちは自分の人生の出発点を自分で決めることはできません。一人ひとり違った出発点を与えられています。しかし、出発点はみんな違っていても人生にはみんな等しく終わりがあります。当たりと思われる人生もはずれと思われる人生も、同じように終わりがあるのです。

画家のゴーギャンに「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」という有名な作品があります。この長い題名は、かつてゴーギャンが学んだ神学校での教理問答に由来すると考えられていますが、彼がこの作品を描いたきっかけは、愛する娘をなくしたことだったと言われています。娘の死に直面して、ゴーギャンは「人はどこから来て、どこへ行くのか」という問いをキャンバスに描かずにはおられなかったのでしょう。

この、「人はどこから来て、どこへ行くのか」という問いかけは、私たちにも向けられているのではないでしょうか。

私たちがこの世に誕生するとき、その命はどこから来たのでしょうか？

そしてこの世を去る時、その命はどこへ行くのでしょうか？

神から離れてしまった私たちは、今生きているこの命が神から与えられたものであるとは思っていません。自分の命は自分のものだと思っています。だから当然神とは関係なく、自分の生きたいように生き、自分が考える幸せな人生を目指して生きていくものだと思っているのです。

しかし、自分の人生だと言いながら、すべてのことが自分の思い通り、願い通りにいかないのが人生です。しかも先のことはわかりません。これから先自分の人生にどんなことが起こるのか、何があるのか、先のことは不確かで見通すことができません。

漠然とした不安を抱えながら生きている私たち、それは神からご覧になると、闇の中を生き、闇に飲み込まれて人生の最期を迎える哀れな人間の現実でした。どんなに一生懸命励み、努力して築き上げた人生も、死を前にしたときには、すべて無意味になり、色あせてしまう人生でしかありません。

神は、そのような滅びに向かって歩む私たち人間を見捨てておくことができなかったのです。そのような私たちを神が救うためには、私たちの人生の方向転換が必要でした。自分の人生は自分のものだと思っている私たちが、その人生は神から与えられた人生であると受け止める方向転換が必要でした。

しかし、神から離れ、神を思わない生き方をしている者にとって、自分の人生が神から与えられたものだと受け止めることはそう簡単にできることではありません。

そこで、何とかして滅びから私たちを救い出したいと思われた神がなさったことは、大切な独り子を私たちのところに遣わすということでした。

しかし、人々が期待する救い主は、自分の願いや望みをかなえてくれる救い主であり、自分の人生を豊かな恵まれた人生へと導いてくれる救い主でした。自分にとって都合のいい救い主が必要なのであって、

神が考えておられるような、私たちを滅びへの道から救い出してくださる救い主ではありませんでした。そこで人々はその救い主を十字架につけて殺したのです。そのことを神はわかっておられました。大切な独り子が殺されることが分かった上で、神はイエス・キリストを私たちのところに遣わされました。私たちを何とかして滅びへの道から救いたいという神の切実な思いが伝わってきます。そこには神の私たちに対する大きな愛があります。

神がイエスによって私たちを滅びから救うために与えようとされたのは永遠の命でした。永遠の命と言いますと、死なずに永遠に命が続くのかと思ってしまいがちです。しかし神が私たちに与えようとされる永遠の命は、寿命が永遠に続くようなことでないのは明らかです。聖書の示す命と私たちが考える生命とは全く違うからです。

創世記二章六節には神が人を創造された話が書かれています。「神は人をつくるとき土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れると人は生きるものになった。」と。人間は死ねば土の塵に還っていきます。実にもろくはかない存在です。そんなもろくはかない人間の鼻に神が命の息を吹き込まれると人は生きるものになったというのです。神との深いかかわりを与えられて人は生きるものになったというのです。

人が生きていると言いうる命は、神との深いかかわりの中で神から与えられるものであるというのです。神に背を向け、神を思わない生き方をしている限り、その人は神からご覧になると生きているとは言えないということになるでしょう。それは滅びに向かう人生にほかならないということになるでしょう。

神が独り子イエス・キリストをこの世に送られたのは、神から離れ、神から迷子になってしまっている

私たちを神のもとに連れ帰るためでした。迷子になった私たちは自分ではもう神のもとに帰ることができません。イエス・キリストは、その私たちを神のもとへと連れ戻し、私たちの救い主となってくださったのです。

救い主イエス・キリストによって、私たちは「自分がどこから来て、どこへ行くのか」明らかになったのです。自分の命は、神から与えられた大切なものであり、かけがえのない命であることを知らされたのです。

神から命を与えられた私たちは一人一人違っています。生まれた環境も賜物も顔かたちもみんな違っています。けれども神は一人一人に違ったスタートラインに立たせて競わせるために、命をお与えになったのではないでしょう。私たちは自分の価値観で、違っていることをいつも問題にします。しかし神は、人をそのような価値観でご覧になってはおられません。神にとってはどの人も大切な一人一人なのです。

神が一人一人に求めておられることは、神の言葉を命の糧として生きることであり、神の言葉に導かれながら一歩一歩歩んでいくことです。

そうさせるために、神はその独り子イエス・キリストをこの世界に遣わして下さったのです。イエス・キリストは、私たちがそのように生きられるよう執りなして下さる方でもあります。そのことを信じて祈ることを神は待っておられます。

《祈り》

天の父なる神さま、あなたに命を与えられた私たちが、神と共に命を生き、神のもとに帰っていく、

そのような永遠の命を与えるために、あなたは大切な独り子イエス・キリストを私たちのところに遣わされました。

このクリスマスの日、あなたが私たちを救うためにお与えくださったイエス・キリストの誕生を心から喜び、感謝し、あなたのみ業を讃美いたします。

主の御名によって。アーメン

永遠の命とは、
唯一のまことの神であられるあなたと、
あなたのお遣わしになった
イエス・キリストを知ることです。

（ヨハネによる福音書　17：３）

二〇二二度　公開東北学院クリスマス礼拝説教

あなたのために生まれました

尚絅学院中学校・高等学校　聖書科・宗教部主任　赤井　慧

ルカによる福音書　二章六～一七節

6ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、7初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。8その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。11今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」13すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

14「いと高きところには栄光、神にあれ、
地には平和、御心に適う人にあれ。」

15天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。16そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。17その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。

クリスマスは誰と一緒に過ごすのか？わたしたちは考えるのです。

クリスマスにひとりぼっちのことを「クリぼっち」といいます。授業で「クリスマスが近づいて来たね」という話をすると、生徒たちは「今年もクリぼっちだ～！」とか「クリスマスまでに彼氏ができるように祈ってください」なんて言っています。

クリスマスに孤独を感じなくてよい所、自分の居場所はどこなのか？私たちは考えます。みなさん、自分の居場所と言える場所はどこにあるでしょうか。家族、友人、恋人、サークル、ゼミ、バイト先、SNS上、思いつかない方・・・様々かもしれません。居場所というのは、私たちの人生のなかで増えたり減ったりすることがあります。

高校3年生の受験期、色々なことが重なり、わたしは自分の居場所を見つけることができなくなったときがありました。

その冬のクリスマスは、この世にわたしが生きていて良い場所などない・・・そんな思いで過ごしていました。

そんなとき、わたしはあるお寺のお坊さんと不思議な出会いをしました。何度かそのお寺に通い、やりとりをする中で、わたしは抱えていた思いをお坊さんに打ち明けました。

「自分は誰からも必要とされない人間です。生きていても仕方ないので、もう死にたいんです。」

もしこんな相談を受けたら皆さんはどう答えるでしょうか。

それまで私が聞いてきた言葉というのは大体、「これから、いいことだって沢山あるから、そんなこと言わないで！」―そんな励ましでした。今振り返れば確かにその通りなのです。しかし、当時のわたしはその言葉を信じることはできませんでした。

受験期に「あなたには何ができるのか」と数字で問われ続ける。気付いたら転んで落とし穴に落ちていた。そして、落とし穴の上から「はいあがれば、こっちにあなたの居場所があるよ！」なんて言われても、その時のわたしには立ち上がる力はありませんでした。

しかし、そのお坊さんは違いました。一通り私の話を聞いて、こう言うんです。

「世界の終わり、地獄の中でがんばったんですね。ところで、さとしくんはどうやって死にたいと思っているんですか？」

びっくりしました。初めてありのままの自分を受け止めてもらえた気がしました。わたしの孤独という穴に、この人は降りてきてくれた。そんな気がしました。私に必要だったのは一緒に落とし穴のなかで「暗いなあ、寒いなあ。この世は地獄だなあ。」と共感してくれる人でした。

この穴のなかで、お坊さんと対話をするなかで、わたしは少しずつ宗教に興味を持ち、学んでみたいという前向きな気持ちがでてきました。

そして、神様はこの東北学院にわたしを導いて下さいました。そしてこの学び舎で、この礼拝堂で、神様の言葉と真実に出会いました。そんな大切な場所で、こうやってクリスマスのお話ができることをとても嬉しく思っています。

いまカルト団体の問題が報道されています。そのニュースを見て、私たちは思います。何であんな怪しい団体に入ってしまうのか。どうして大金をつぎ込むほどに、あんなにのめり込んでしまうのか。でも私は他人事ではなく、感覚的に理解することができます。

カルトは巧みなマインドコントロールをもって勧誘をしますが、彼らは「居場所のようなもの」を提供してくれます。これまでの人生ではなかったような歓迎をしてくれる。目標を達成すると、仲間たちが賞賛をしてくれる。だからもっと頑張ろう、献金や出資をしようとなるのです。

私たちも、自分の居場所、自分の帰る場所を求めています。

私たちが人生の中で本当に求めているものは、いつでも「ただいま」と言える関係性や居場所です。ボロボロになっても無条件に自分を受け止めてくれる場所。そんな場所は、なかなか見つかりません。親子関係、友人関係、恋人関係…突き詰めてみれば、条件付きだったり、有限だったりする居場所なのかもしれません。

今日、クリスマスの出来事を聖書から読みました。今日の登場人物は皆、居場所がなくて困っている人たちでした。

主イエスの父と母になるヨセフとマリア、出産が近づいているにもかかわらず、二人は旅をしなくてはなりませんでした。時の権力者の命令に従い、住民登録のために旅立つのです。

二〇〇〇年前、最初の住民登録によって大きな変化が起きた。そのことを聖書はさりげなく示しています。

住民登録の目的―それは、吸い上げることのできる税金や兵力の計算のためでした。「生産性」がある人間がどれぐらいいるのか。利用できる人がどれだけいるのか。目に見える強さと力にこそ価値がある―そんな時代だったということです。

いつ赤ちゃんが生まれてもおかしくない状況で、何とか二人はベツレヘムに到着しました。しかし「彼らには泊まる場所がなかった」のです。たらい回しにされた二人がやっとたどり着いた場所は家畜小屋でした。

そこでマリアは出産することになります。誰からも歓迎されず、何の助けもない場所です。この町に二人の居場所はありませんでした。そこに救い主、イエスが生まれた。

しかし、その救い主は小さな赤ちゃん、風前の灯火のような命です。「救い主」どころか「救われ主」という方が適切ではないかと思うのです。

しかし、神様はいつもそういう最も小さく弱いところから、御心を始められるのです。強さや「生産性」という言葉の反対の場所から、救いの計画を進める方なのです。

人間の赤ちゃんはどんな動物よりも弱く、生きるためには不十分な状態で生まれてきます。圧倒的に誰かの助けを必要とする存在です。赤ちゃんの泣き声は「あなたの助けが必要だ」という叫びに他なりません。ヨセフとマリアは、自分たちこそがこの赤ちゃんの居場所とならなければならないと気付くのです。神様は、そんな弱さを結び目にして、二人の居場所を創られたのです。

わたしたちも「あなたが必要だ」「あなたがいてよかった」…そんな言葉を必要としているのではないでしょうか。

マザーテレサはこう言いました。

「この世での最大の不幸は、戦争や貧困などではありません。自分は誰からも必要とされていないと感じることなのです。」

その通りだと思います。では、どうしたら私たちは必要とされる存在となれるのでしょうか。

「あなたの魅力や長所はなんですか?」

「あなたには何ができるんですか?」

「あなたには、社会から必要とされる能力がありますか?」

そんな質問にしっかり答えることができる人が、「必要とされる人間」なのでしょうか。

神様は、そんな面接官のような問いをあなたに投げかけたりはしません。聖書が伝えようとしていることは「必要とされる人間になりましょう」ということではありません。

むしろ神様が期待されていることは、クリスマスの主イエスの姿に、わたしたちが習うこと—「あなたが必要だ!あなたの助けが必要だ!」と叫ぶことです。

でも、できれば「あなたがいてくれて良かった」と言われる側に、わたしたちはなりたい。

しかし、いま私たちの社会に必要なのは、他者を求めることなのかもしれません。互いに「あなたが必

要なんだ」と言える隣人愛の中で生きる。そのためには、私たちこそ身近な人に「助けて」と言い合うことが必要なのかもしれません。

ひとに助けを求めるのは、決してネガティブなことではありません。助けを求めることは、相手の存在と能力を認め「あなたが必要だ」ということをまっすぐに伝えることなのです。それは結果として、互いの居場所を創り出す第一歩になります。

救い主が赤ちゃんとして生まれた。そこにはとても大切な意味があります。

私達一人ひとりは神様に創られた、生まれたときから助けを必要としている存在なのです。救い主が赤ちゃんとして生まれたということは、それを「よし」とされた証拠です。しかし私たちはいつの間にか、そんな人間の本質を「もっともらしい嘘」とすり替えてしまうことがあります。

全国の学校でそんなことが日常茶飯事です。色んな事情があって学校に来られない子に、先生はいいます。

「このままだと勉強についていけなくなるし、そうなれば君の進路だって閉ざされる。このままだとどこにも行くところがないぞ。将来のことをどう考えてるんだ?」

そして親は言います。「他のみんなは元気に学校に行っている。なんであなただけ家にいるの?私たちが死んだら、どうやって一人で生きて行くの?」

そう言いたくなる親心は分かります。しかし、それは互いに居場所を奪っていく言葉です。居場所がないのに、どうして「行ってきます」と胸を張って言うことができるでしょうか。

「人に迷惑はかけないようにしよう」

「ひとりでも生きていける能力を身につけよう」

そう思っている方、これまでよく頑張ってこられたと思います。

しかし神様はあなたを創られたとき、そんな言葉をあなたの遺伝子には刻んでいません。むしろたくさん助けられることを通して、自分が大切な存在であることに気付いてほしい。愛するためにも、愛されていることを知ってほしい。そのことを神様は期待しておられます。

わたしも自分の過去を振り返ると、自分の人生の決定的なポイントというのは、努力の結果ではなく、誰かに助けられたときです。あの日、あの時、あの人に助けてもらったからこそ、いまの自分がある。

だれかに助けられることで、私たちは他者をよりよく助ける力と知恵を得ることができるのです。私自身も助けてもらった経験が、「誰かのためになりたい」という人生の動機になっています。

しかし、現実のなかで、私たちはすぐに反対の言葉に心を引き込まれ、偽りに留まってしまうことがあります。

数年前に学校の研修で、石巻の大川小学校というところに行ってきました。大川小学校は、東日本大震災のときに津波の被害に遭い、いまはボロボロの校舎が残っています。大川小学校に通っていた多くの子どもたちと教員が津波の犠牲になりました。

大川小学校は、海から五㎞離れていて、地震発生から津波到達までは五〇分ぐらいかかる場所にありました。その五〇分間で避難は十分にできたはずなのですが、子どもたちは校庭で津波にのまれました。どうしてそんなことが起こったのでしょう。

この大川小学校で娘さんを亡くした、語り部活動をされている佐藤さんという方から、お話を聞きまし

た。そして「もしここに避難していれば助かった」という場所にも案内してもらいました。その場所というのは、小学校のすぐ裏にある山でした。

私もその裏山に登ってきました。小学生のつもりになって、試しに校庭からその裏山まで走ってみました。そしたら、四〇秒ほどであっけなく走って登ることができたのです。それぐらいの距離感です。

しかし、先生たちは、津波警報が鳴るなか、子どもたちを校庭で五〇分間待機させていたのです。そればかりではありません。地震が収まってすぐに自分の判断でその裏山に逃げた子どもたちもいたのですが、その子たちは先生から「危ないから戻れ！」と言われて、校庭に連れ戻されたそうです。

わたしも教員なので分かります。先生たちは、子どもたちの命を守りたかったはずなんです。

ある先生は、寒がる子どもたちのために校庭で焚火までしていたそうです。しかし、先生たちは五〇分間、危険な場所で正しさを求め、そこに津波がやってきたのです。語り部の佐藤さんは続けてこんなことをおっしゃいました。

「どんなに近くてよい避難場所があっても、そこに逃げるという判断と行動をしなければ命は助からないんです。防災とは、津波の恐怖をあおることではありません。山の上で、みんなの命が助かって良かったねと言って抱き合うことなんです。山から見える景色はめちゃくちゃでも、大切なことは、みんなで生き延びるというハッピーエンドを想定することなんです。一番恐ろしいのは津波ではありません。近くの山に逃げないことです。」

これは災害の話だけではないと思います。私たちが困難に出会ったときも同じことが言えるのではないでしょうか。何かあったとき、本来向かうべき場所がある。泣き叫びながらも、帰るべき居場所があるこ

とを忘れてはなりません。

皆さんも生きるなかで色んな言葉に出会ってきたでしょう。それはときに、みなさんの自尊心を押し流し、居場所を奪うものだったかもしれません。

「おまえなんか生まれてこないほうがよかった」

「わたしは必要のない人間だ」

そんな言葉で心が満たされたとき、この世は地獄です。

しかし、その偽りの言葉に、あなたは留まるべきものではない。

あなたが本当に立つべきところはすぐそこにある！

そのことを示すために、クリスマスの出来事が起こったのです。

今日の聖書には、他にも居場所を見失った人たちが登場してきます。それは「羊飼いたち」です。羊飼いは、厳しい仕事でありながら、いろんな事情で差別されている人たちでした。罪深い者とされ、「おまえなんかいなくていい」とされてきた人たちです。しかし、そんな羊飼いにこそ、神様からの第一報が届けられたのです。

「救い主が、あなたのために生まれました。その救い主は飼い場桶で寝ています。」

主イエスは、家畜小屋で生まれなければならなかったのです。羊飼いが、泥で汚れたままでも、ありのままで訪ねることができる場所。それが家畜小屋だったのです。神様はどんなに寒くて、汚いところでも

来て下さる。
あなたが何者だとしても、どんなに汚れていても、関係ない。
あなたのためなら手段を選ばない。
そして、天の大軍が加わって、神様が全力で伝えるのです。

「いと高きところには栄光、神にあれ。
地には平和、御心にかなう人にあれ。」

「御心に適う人」ってどんな人でしょうか。難しい言葉です。
ここは、キリスト教の学校です。だから、この礼拝堂がある。新しくできた素晴らしい礼拝堂も、東北学院がキリストによって建てられた学校であることを、この地に示しています。
それでは、「キリスト」とは何だ。私たちは、そのことを絶えず思い出し、そこに立ち返りたいと思います。
キリストとは「救い主」という意味です。イエスさま、神様の本質は、私達を助け救い出す方だということです。神様はいつもわたしたちのことを助けたい、救いたいと思っている方です。
偽りの言葉の中で生きるのではなく、「あなたは大切な存在だ。あなたの代わりはいない。あなたが必要なんだ。」という真実の中で生きてほしいと願っている方です。
その「キリスト」という言葉の裏側を見ると「御心に適う人」とは何かということが見えてきます。

「御心に適う」

それは「わたしは一人では生きられません！神様、あなたが必要です！わたしには隣人が必要です！」と告白することです。そんな弱い自分のことなんか好きになれない。許すことができない。それも、いいのです。

神様はそんなあなたのことも赦し愛している。このクリスマス、神様の愛という居場所があることを知っていただきたいと思います。

あとがき

二〇二二年度は、ロシア軍が隣国ウクライナに軍事侵攻するという衝撃的な出来事により、世界の平和秩序がまさに瓦解していく様相を伝える状況の中で幕を開けました。ウクライナの首都キーウ近郊のブチャでは、大勢の市民が虐殺されるという痛ましいニュースがありました。そして夏には、元首相が暴漢の凶弾に倒れ、命を奪われる事件も起き、社会に衝撃が走りました。そして、日本における新型コロナ感染症の流行も、第七波、第八波と、これまで以上に感染が拡大し、一日における感染による死者数も過去最高の数値が何度も更新されるなど、私たち人類にとって、またわたしたち一人ひとりにとって、「いのち」とは何であるのかを考えさせられる出来事が数々生じました。

ここに収録された説教は、東北学院が礼拝において、聖書の御言葉をとおして、この「いのち」の問題と向き合った記録でもあります。この説教集は東北学院大学に入学する一年生に配布され、東北学院の教育の真髄に触れていただきますが、それ以外にも一人でも多くの方々の元にこの説教集が届き、この説教集が読まれることを願います。最後になりますが、今年度も礼拝で語り、原稿を寄稿してくださった先生方に心から感謝いたします。どうか「地には平和、御心に適う人にあれ」（ルカ二：一四）。

執筆者一覧

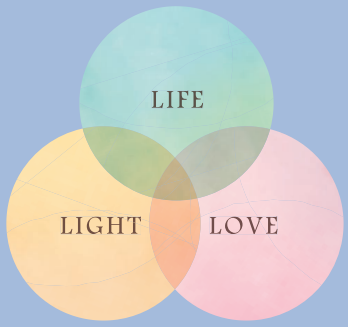
幼稚園園長	島内　久美子
中学校・高等学校　宗教主任	松井　浩樹
中学校・高等学校　聖書科教諭	髙　アンナ
榴ケ岡高等学校　宗教主任	西間木　順
院長・学長・宗教センター所長	大西　晴樹
大学宗教部長・宗教センター主任	原田　浩司
宗教センターチャプレン	野村　信
大学総合人文学科長	川島　堅二
大学宗教主任	出村　みや子
大学宗教主任	木村　純二
大学宗教主任	田島　卓
大学宗教主任	藤野　雄大
大学宗教主任	渡邊　有美
大学宗教主任	椎名　雄一郎
大学宗教主任	大門　耕平
理事長特別補佐　宗教センター担当	鐸木　道剛

日本基督教団　仙台広瀬河畔教会　牧師　望月　修
日本基督教団　仙台東一番丁教会　牧師　瀬谷　寛
日本基督教団　仙台東六番丁教会　牧師　中本　純
日本基督教団　仙台長町教会　牧師　林　完赫
前理事長・院長・学長　松本　宣郎
尚絅学院中学校・高等学校　聖書科・宗教部主任　赤井　慧

東北学院礼拝説教集

第三号
二〇二三年三月三十一日発行

発行責任者　院長・学長・宗教センター所長　大西　晴樹
編集責任者　大学宗教部長・宗教センター主任　原田　浩司
印刷・製本　株式会社　阿部紙工
問い合せ先　東北学院宗教センター
〒980-8511　仙台市青葉区土樋一―三―一
☎〇二二・二六四・六五五八



2023年３月31日
東北学院宗教センター発行